

中国古典文学と私——阮籍の『詠懷詩』

福嶋亮太
（立教大学）

自分で言うのは恥ずかしいが、私の名前は三国時代の軍師である諸葛亮からとられた。それもあって『三国志演義』には一〇代前半のときに熱中し、畏れ多いことに、岩波文庫版の翻訳をされた京都大学の小川環樹先生に質問の手紙を出したこともある。小学生の幼稚な質問に対して、先生が懇切丁寧な返信を青ペンでしたためてくださったことは今でも忘れられない。

もともと、その後は三国志の世界からは遠ざかり、京都大学では中国文学を専攻したものの、三国時代の文学にも『三国志演義』にもほとんど触れることはなかった。ただ、一人だけ例外的に関心をもっていた詩人がいる。それは「竹林の七賢」を代表する三世紀の思索家・阮籍（三〇―二三三）である。阮籍には、中国文学史のなかで異彩を放つ『詠懷詩』という連作詩がある。私は学生時代に吉川幸次郎先生の『阮籍の「詠懷詩」について』（岩波文庫）という本を読んで、この詩の存在を知った。吉川先生の本はコンパクトだが、非常に濃

密に書かれた名著である。中国の詩をこれほど精密かつ柔軟に読めるものなのかと、当時知的なショックを受けた。それ以来、私にとって『詠懷詩』は中国文学を見渡するときの一つの基準点となった。その一群の五言詩のうち、冒頭作品は特によく知られている。私なりの読み方をちよつとだけ示してみよう。

夜中不能寐	夜中寐ぬる能わず
起坐彈鳴琴	起坐して鳴琴を弾ず
薄帷鑑明月	薄帷明月に鑑らされ
清風吹我衿	清風我衿を吹く
孤鴻号外野	孤鴻外野に号び
朔鳥鳴北林	朔鳥は北林に鳴く
徘徊將何見	徘徊して將た何を見ん
憂思獨傷心	憂思して独り心を傷ましむ

（訓読は岩波文庫版『文選 詩篇（二）』に基づく）

夜更けにひとり眠れぬまま起きだし、琴を爪弾く。薄いと
ばりは明月に照らされ、清風が私の衾もとに吹き込む。一
羽の鴻が野末に叫び、朔北からきた鳥たちは北の林で鳴く。
さまよい歩いて何が見えようか。憂愁のなかでひとり心を
痛ませる――

この不眠は外界の経験からではなく、純粹に詩人の内部から
やってきたものである。これがとても新しい。阮籍はこの五
言詩の位置を、社交でも政治でも自然でもなく、きわめて主
観的なところに定めたのである。そして、琴が迷える心を浄
化し、その心と音の連環にさらに澄明な光と風が染み込んで
くる。こうなると、物質の世界は限りなく希薄になっていく
だろう。不眠の詩人の心は、フイジカル（物理的）な水準に
とどまらないメタフイジカル（形而上的）なものに浸されつ
つある……

不眠の主観から立ち上がった詩は、やがて孤高の「鴻」を結
晶化する。阮籍は鳥のイメージを好んだ。それはメタフイジ
カルな領域の隠喩にはびつたりであつただろう。世界にある
ことの孤独と恍惚が「孤鴻」のイメージには凝縮されている。
詩人の心はどこにも固定されなしし、誰もその心を占領する
ことはできない。詩人はあてもなく「徘徊」するが、そこはも
はや物質が消え失せ、浄化された世界である。だから、その

「憂思」にはどこにも宛先がない。静寂のなかで、ただ詩人の
かなしみの心だけが哲理的に研ぎ澄まされていくのである。

私はこの異様な詩を「不眠のエクスタシー」の表現として
読んでみたい。人氣の絶えた夜の覚醒のなかで、詩人が内部
の純度を高め、光と風を受けた孤独な鳥として飛び立つとき
まるであらゆる現実の制約が忘れられたようである。このめ
くるめくエクスタシー（恍惚）のなかで、阮籍はただ魂の力
だけで成立している世界をかたどった。三世紀の段階でこれ
ほどまでに純度の高い抒情詩が書かれたことに、私は驚かざ
るを得ない。そこにはどこか、二〇世紀ドイツの象徴詩人
シュテファン・ゲオルゲの抒情詩を思わせるところもある。

阮籍はさすらいと孤独の詩人である。そして、人間の魂の
迷宮性に気づき、それを象徴的なやり方で抽出した中国最初
の詩人である。『詠懷詩』は八二首にも及び（『文選』はその
うち一七首を収める）、詩人の孤独がさまざまなシチュエー
ションのなかで探求される。これだけの心象のスナップを制
作し続けるのは並大抵のことではない。実際、これほど長い
連作はその後の中国でもほとんど生まれなかった。

ところで、こうした異例の詩が作られた背景はどういうも
のであつたのか。ちよつと突飛なたとえになるが、二〇世紀
の半ばにアメリカのカウンター・カルチャーにおいて「意識

の政治」や「想像力の革命」が唱えられたことがある。当時のいわゆるヒッピーやビートニクはLSD（合成麻薬）や禅の力を借りて新たな意識形態を探索しようとした。今のコンピュータ文化の一つの起源も、このカウンター・カルチャーにある。

阮籍が『詠懷詩』でやったことも、いわばカウンター・カルチャー的な「想像力の革命」に近いだろう。そもそも、彼の生きた時代は服薬や飲酒の習慣が広がった時代であった（そのことは魯迅の講演「魏晋の気風および文章と薬および酒の関係」で詳しく述べられている）。型破りの政治家にして詩人であった曹操も、その代表作『短歌行』を「酒に對し歌に當たる／人生幾何ぞ」と歌い出した。酒は有限の人生の密度を高め、歌心を高揚させるトリガーとなった。中国の抒情詩はまさに酒とともに確立されたのである。

飲酒や服薬、さらに放浪は新しい思想、新しい文学、新しい精神へとジャンプするための踏み台となった。この三世紀の「文化革命」の時代にあつて、阮籍は当時のボヘミアン（慣習を無視した放浪者）として、政治や社会の規範に毒されない人間や芸術を目指した。音楽には音楽固有の価値があるという論説を書いたのは、阮籍と並び称される詩人の嵇康であつた。彼らが酒や薬と深い関わりをもっていたのは言うまでもない。

そもそも、阮籍の伝記には、心を許した者は「青眼（黒目）」で迎えて俗物は「白眼」で迎えたとか、母の葬儀の日にも大酒を飲んでいたとか、車を走らせて道が行き詰まると慟哭して帰ったとか、その手の反社会的な逸話がいろいろと記されている。もつとも、阮籍はいたずらに悪ふざけをしたわけではないだろう。彼にとってしきたりや偽善は許しがたいものであり、だからこそ型破りの身振りそのものを強烈なメッセージに仕立てたのだ。

実際、これらの奇矯な言動に対しては、今で言うパフォーマンス・アートに近い印象も受ける。『詠懷詩』其八は「路を失して將た如何せん」と締めくくられるが、道を失った「さまよう詩人」にとつて、パフォーマンスをやることと詩を書くことと思索することは、恐らく渾然一体となつていたもとより、三国時代のような政治的混乱期には、詩人はたえず生命の危機にさらされる。しかし、阮籍は思索と抒情詩をパフォーマンスと隣接させながら、したたかに生き延びてみせた。これは中国文学史のなかでも稀なことである。

いずれにせよ、私にとって『詠懷詩』は汲めども尽きない魅力を備えた詩である。中国詩という括りを超えて、詩そのもののもつ可能性を指し示すような作品に学生時代に出会えたのは、まさに僥倖であつた。

私の好きな中国古典

漢文の授業で扱われる中国古典の中には、マンガやゲーム、ドラマをとおして現在まで親しまれているものや、故事成語・格言のように日常に息づいているものが多くあります。そこで、漢文教育や中国（古典）にかかわるお仕事をしたいらっしゃる方々から、推薦する作品・印象的な作品とその魅力を教えてくださいました。（掲載は五十音順です）

◆アンケート内容

- ① 中国古典（～清代まで）で、好きな作品を教えてください。
 ② ①、②のどちらかにお答えください。①中国古典に興味を持ったきっかけ。②高校時代に習って印象に残っている作品。

井波律子（いなみりつこ）

国際日本文化研究センター名誉教授

①『論語』『論語』は孔子の対話の記録であり、対話の相手のほとんどは弟子たちである。ゆったりと落ち着いた顔、頭の回転の速い子貢、一本気でヤンチャ坊主の子路をはじめ、それぞれ個性あふれる弟子たちと交わした対話が、いきいきと臨場感ゆたかに再現されており、読んでいるうちに、自分もその場にいるような弾んだ気分になってくる。また、ここには、おりおりの会話の相手である弟子たちの個性や理解力に配慮しながら、

彼らに柔軟に向き合い、知的刺激を与える、孔子の稀有の魅力も浮き彫りにされており、まことに面白い。

②『論語』先進第十一の第二十六章 この『論語』でいちばん長い章を習ったのは、何年生のときだったか、記憶は定かでない。しかし、孔子と四人の弟子（子路、曾^{そうしつ}皙、冉^{ぜん}有、公西華）が同席し、孔子が彼らに抱負をたずね、彼らがそれぞれ抱負を述べるという構成によるこの章には、演劇的な面白さがあると感嘆した記憶がある。とりわけ、曾皙（曾子の父）の語る解放感あふれる美しい夢にいたく心を揺さぶられたのだった。

宇賀神秀一（うがじんしゅういち）

つくば国際大学東風高等学校常勤講師

①『日知録』（顧炎武）『日知録』は清朝考証学を代表する顧炎武の著作である。その出会いは、私が大学院生の頃、恩師に誘われて参加した湯島聖堂での輪読会であった。もともと『日知録』を読み始めた当初は、書かれた目的すら全く分からずに、悶絶していた。しかし、徐々にではあるが、分らないことばかりの文章には、分かる喜びも沢山詰まっていることを知った。そうした学問の楽しさを私に教えてくれたのが、顧炎武の『日知

録』である。

② ①私が漢文に興味を持ったきっかけは（というよりも興味が高まった経緯に近いが）、様々な輪読会に参加させて頂いたことだ。輪読会は、様々な思いが自分自身にまとわりつく。たとえば、準備中の焦燥感、発表中の緊張感や満足感、あるいは自分の浅学ぶりに抱く羞恥の念など。そうした様々な思いが巡る輪読会を通じ、漢文と主体的な関わりが持てたから、私も生涯、漢文に関わりたいと思うようになったのだと感じる。

神谷康宏（かみややすひろ）

有隣堂（誠品生活日本橋）

①『老子』一九九〇年代の中頃、当時愛読していた徳間書店の漫画版『風の谷のナウシカ』が全巻完結した。ちょうど小学生の頃実家にあつて読みかけたまま放擲していた中公文庫の『老子』を、遅い正月休みに帰省した折ふと手に取り、これはひよっとすると「ナウシカ」じゃんと思ったのがきっかけ。漫画版

「ナウシカ」は宮崎駿がまだ血気盛んな頃に描いたからか、紆余曲折の末、激烈な結末に至る（そこが根本的に『老子』とは異なる点ではある）わけだが、しかしその若さ、激しさも、『老子』の思想を繰り返し読むとその中に穏やかに回収されるような気がした。

② ①②「己亥の歳」（曹松） 確か高校の漢文の授業で「一将功成りて万骨枯る」という結句に触れ、自分は一将か万骨かどうか側だろうとしばし考えたが、すぐに「まあ万骨だろうな」という結論に達した。その後社会に出てこの言葉は現代の世においても普遍的だなあと詠嘆する場面がたびたびある。バカな一将も困り者だが、その取り巻きがまた質が悪い。

喜多瑛優（きたあきひろ）

奈良教育大学修士課程

①「長恨歌」（白居易） 私の好きな中国古典作品は、玄宗帝と楊貴妃の恋愛を描いた近体詩、「長恨歌」です。歴史的に見ると楊貴妃という人物は「傾国の美

女」とされ、ネガティブな側面が強調されます。その一方で「長恨歌」のなかでは楊貴妃のか弱さや玄宗帝に対する愛などが強調して描かれています。詩ではありながらもその物語性の高さ、歴史叙述の巧みさから、はじめて「長恨歌」を読んだときには長編の小説を読んでいるような気になったのを覚えています。「比翼の鳥」「連理の枝」となることを願いながらも、運命に大きく引き裂かれてしまふふたりの悲しみは、今でも多くの人の心を動かすでしょう。

② ①中学生の頃、学校で習った杜甫「春望」が契機でした。力強く、硬派な感じのする漢詩は、日本の詩が好きな私の心をつかんだのです。「国破れて山河在り」というような書き出しは、現代日本語の詩ではまずありえないものでしょう。「人間五十年……」の「敦盛」に憧れを抱いていた私は、書き下した漢詩をそらんじることに魅力を感じるようになりました。

草薨主税 (くさなきちから)

有隣堂 (出版部)

①『史記』(司馬遷)

②①現在、世界遺産に登録されている秦始皇帝陵及び兵馬俑が一九七四年に発見されたニュースは子供ながらに印象が深かった。のちに東京国立博物館の特別展を見学(二〇一五)。

『史記』は中国の第一の正史と呼ばれる歴史書であり、中国の歴史を学ぶ者は、はじめに読むべき本。なかでも「刺客列伝」にある「始皇帝暗殺」の話は、映画などにもなっているが、荊軻(刺客)が故郷を離れる時に詠んだ詩歌が有名。「風蕭蕭として易水寒し、壯士一たび去りて復た還らず」。

また、始皇帝以降で言えば「馬鹿」の語源となった二世皇帝のエピソードや、項羽と劉邦の戦いにおける「四面楚歌」など、四字熟語の語源もわかる。『史記』は「知」の宝庫である。

興膳宏 (こうぜんひろし)

京都大学名誉教授・日本学士院会員

①『莊子』好きな作品はいろいろあるが、ただ一つというなら、この書を挙げたい。常識の意表をつく逆説的な発想、自由奔放な想像力、鋭い人間観察、巧まぬユーモア、それらが渾然と一体化して、独特の思弁的な世界を形成している。単なる道家思想の書たるにとどまらず、後世の詩文における重要な淵源ともなっている。

②②『新唐詩選』(吉川幸次郎・三好達治著)との出会い

高校生のころ、漢詩といえば、武張って堅苦しくお説教じみた印象を抱いていたが、たまたま書店で手に取ったこの書にすっかり引きこまれ、漢詩のイメージが一変した。何よりもみずみずしい感覚で、唐詩を平易に紹介し、ことばの奥深さ、人間の生き方の多様性へと読者を導く魅力に圧倒された。そしてその底には、世界文学的な視野で唐詩を含む中国文学を理解しようとする強い意欲がはたらい

ている。これは中国文学の門へと私を導いた最初の書である。

佐藤正光 (さとうまさみつ)

東京学芸大学教授

①『春残』(李清照^{りせいしょう}) 南宋の女性詩人、李清照の七言絶句。長い髪を梳くのも辛いという表現が女性らしく、また郷愁の心と病の身とを重ねている。彼女の「金石録後序」を読むと、愛する夫との生活やその死別、戦乱の悲哀を経てここに至ったことがよくわかる。詩の後半は雀の子と薔薇を描く。もしこの詩の後半が逆で前半が景、後半が情なら普通の詩だが、情が先にあるのでこの景は意義深い。雀の子の必死に生きようとする姿、花を見に出られない作者に香りを送ってくれる薔薇と風の優しさ。自然が作者を慰め励ます、情の深い作品として最も印象深い。

②①研究者としてのきつかけとは別だが、『唐詩三百首』から詩の構造の分析に強く興味を持つようになった。清の孫

洙撰とされる原本には「山」「水」、「開」「見」などの傍注がある。前者は山水表現を、後者は聴覚、視覚表現を示している。これらの傍注に興味を持って調べるところに出会ったのが杜甫の「登高」。この方法で詩の構造を分析し、なんと多くの技巧が駆使されているかを知った。

佐藤丈宗

(さとう たけむね)

丸善(名古屋本店)

①『淮南子』 私が担当している人文書というジャンルは実利に直結しているようにみえないため、趣味や雑学の類と見なされたり、不要論の矢面に立たされることがある。そんな時に思い出すのが『淮南子』にある「鳥の将に來たらんとするあれば、羅を張りて之を待つも、鳥を得る者は、羅の一目なり。今、一目の羅を為れば、則ち時として鳥を得ること無からん(有鳥將來、張羅而待之、得鳥者、羅之一目也。今為一目之羅、則無時得鳥矣)」(説山訓)と「一目の羅は、以鳥を得べからず(一目之羅、不可以得為

鳥)」(説林訓)だ。霞網は鳥を捕まえている部分だけでは用をなさない。鳥を捕まえている部分以外は機能を果たしていないように見えるが失くなってしまった網としての役割を果たさなくなる。役に立っているように見える部分だけを追いかけていては目的は達成できない。無用之用、人文学とはこれである。

②②「涼州詞」(王翰) 七言絶句、わずか二十八字の中に情景描写と悲憤慷慨と起承転結が過不足なく展開される物語に漢詩のもつ凄みを感じた。酔臥沙場君莫笑。

立原透耶

(たちばら とうや)

小説家・翻訳家

①『封神演義』『水滸伝』『三国志演義』『聊斎志異』『西遊補』

②小学生の時に『水滸伝』(講談社文庫)を読み、「しびれ薬を盛って殺して人肉饅頭にし、それをさらに人に食わせる」というシーンに、文字通り「しびれ」、夕食の場でいかにすごいかを熱く語った

ところ、父親に心の底から将来を心配された挙句、「それよりも『三国志演義』を読みなさい。こちらの方が教育上好ましい」と勧められる。読み終えた後、先に読んでいた姉が「孔明さま素敵」、漫画を読んだ弟が「張飛が好き」という中、鼻息荒く「曹操さま素敵!」と絶叫する私。父親、またもや肩を落として「この娘の将来はどうなるのか」と案じたという……。

元々は『西遊記』が中国古典文学を意識した最初の一冊ではあるものの、やはり強い印象を残したのは『水滸伝』。さらに大きな転換期となったのが『封神演義』。浪人だか大学生の時に『封神演義』に出会い、どうしても原書で読みたいと熱望するようになり、国文学科であったにも関わらず、卒業論文を『鏡の国の孫悟空』(『西遊補』当時日本語訳なし)で執筆、大学院で中国文学専攻へと進んだ。そしていまや中国SFにハマる日々。人生何がおこるかわかりません。

棚橋尚子（たなはししょうじ）

奈良教育大学教授

①『水滸伝』『水滸伝』は小学生のころ、講談社から出版された児童向けの文学全集で読んでとても面白いと思った作品である。同時採録されていたのが大変メジャーな『西遊記』だったのだが、『西遊記』のマジカルな世界ではなく、『水滸伝』の活劇の世界を好んだのは、『水滸伝』の影響を受けた馬琴の『南総里見八犬伝』を先に読んで夢中になり、内容に通底するものがあったからかもしれない。（そりやそりだ。）

②② 四面楚歌（『史記』『四面楚歌』を作品と言ってよいのかはわからないが、とにかく高校のときの漢文学習で一番心に残っているのは項羽のかつこよさ、人間臭さである。「鴻門之会」「四面楚歌」「捲土重来」などをセットで学習したと思うが、とにかく私は項羽びいきで、劉邦が覇権争いに勝つことになんかの不完全燃焼感を覚えていた。歴史だから仕方ないが、心底項羽に勝ってほしかった。

「虞や虞や汝を奈何せん」——項羽の詠んだ詩を何度も口ずさんだことを覚えている。

筒井彰子（つついしょうじ）

高松市立龍雲中学校教諭

②①高校三年生の時、父の職場にいた中国人研修生と話をしたことがきっかけで中国に興味をもった私は、中国語を学びたいと考えて中国語中国文学科に進学しました。そこで指導してくださったのが、石川忠久先生でした。テキストは『唐詩三百首』。

それぞれの詩や作者の詳しい解説はもちろんですが、「春望」や「元二の安西に使ひするを送る」など、中学や高校時代に習った詩でも、テストの答えにはない、深く広い解釈を聞かせてくださり、私はすっかり「漢詩の世界」に引き込まれたのです。石川先生は、美しい中国語での朗読と解説の終わりに、いつも「どうだい、いい詩だろう？」と、扇子で扇ぎながら本当に楽しそうに語ってくださいなのです。「こんなにも楽しい読み味わ

い方を、子どもたちに伝えたい！」そんな思いから、古典を専攻する教職コースを選び、卒業後は故郷で中学校教員になり、今に至っています。

残念ながら中国文学とは縁遠い毎日です。『唐詩三百首』を開くこともありません。ですから、二年生担当の年は漢詩の授業が楽しみです、つい、話が長くなってしまいます。そして、授業の終わりにには、「どう、いい詩でしょう？」と、ちよつと石川先生の真似をしてみます。

杜康潤（とこうじゅん）

漫画家

①『三国志演義』 人間の面白さや奥深さ、文化の違いや普遍的なものなど、壮大であらゆる要素が詰め込まれている『三国志演義』は何度読んでも飽きません。第百二十回の最後にある詩を読み、そして第一回の冒頭の詩に立ち戻るとき、言葉にならない感慨が湧きます。物語の構成や展開、人物描写や配置などについても非常に参考になることが多く、お話

作りの勉強にもなっています。

②「塞翁馬」(『淮南子』)の一文、「夫れ禍福の転じて相生ずるは、其の變見難きなり(夫禍福之転而相生、其變難見也)」。声に出したときのリズムと響きが良く、お気に入りとなりました。ここに込められた「人生の幸・不幸は予測が難しいものだ」という教訓は歳を重ねるほどに味わいが増し、心のバランスを取るための指針として今でも時折思い出すようにしています。

ひかわ玲子 (ひかわれいこ)

小説家

①『紅樓夢』(曹雪芹) 二十代の頃、北

京に友人と旅行したことがあり、その時に絵入りの豆本のようなものがあるような種類がいっぱい売られていて、絵が上手いものを選んで買ってきたのですが、その多くの題材がこの『紅樓夢』という作品でした。それでこの話は何だろうと思ったのがきっかけで、読んでみた作品です。けれど、日本ではほとんどの人が

聞いたことも読んだこともないかしら、と思います。話題になっているのをあまり聞いたことがありません。中国の『源氏物語』とよく紹介されていますが、主人公の賈宝玉は確かに物語の中では光源氏に似た立ち位置で、姉は皇帝の貴妃であり、富貴な高官の跡取り息子として、美しい少女たちに囲まれて育ちます。彼は科挙(官吏登用試験)の勉強は大嫌いで、恋などが描かれた世俗的な読み物が大好き、そして、体が弱いけれどプライドが高くて感性が鋭い林黛玉と女らしくしとやかで従順な薛宝釵の間で揺れる、という——そして、そうした少年の世界が姉の死と一族の没落とともに最後にすべて崩れ落ちる、頹廢美が雅びな世界です。

②①『中国名詩選』は、よく開いて眺める詩集です。小説よりも、こうした詩のほうが創作のインスピレーションを与えてくれるので、興味を持ったきっかけは、漢字の持つ表現力を漢詩が教えてくれるから、かもしれません。

矢澤喜成 (やざわよしなり)

立正大学付属立正高等学校教諭

①漢文唐詩宋詞元曲とすれば、明清小説だろうか。汗牛充棟の中国の典籍で、「面白い」とすれば、やはり『三国志通俗演義』・『西遊記』・『水滸伝』・『金瓶梅』の「四大奇書」ではないか。就中『水滸伝』は、花和尚魯智深などの登場人物が、「痛快無比」である。そこに、それを生み出した明代の民衆の息吹を感じる。古白話の小説が、教科書に採用されて、高等学校の教材になることは無かるうが。

②②高等学校で漢文の入門期に触れた「名言」、「鼓腹擊壤」・「麦秀之歌」・「臥薪嘗胆」・「鶏口牛後」・「先從隗始」(『十八史略』)・「塞翁馬」(『淮南子』)などの「故事成語」や「寓話」に登場する帝堯陶唐氏・箕子・伍子胥・蘇秦・郭隗、そして、塞翁等の人物の生き様や考え方が、強く印象に残っている。還暦を迎えようとしている自分の人生を振り返ってみて、こうした価値観や人生観が、自分に染みついていることを改めて感じている。

●特集 日本文学に息づく中国文学

地図監修…菊地隆雄

中国文学は、古来、日本の文学に大きな影響を与えてきました。『懷風藻』などの日本漢詩、王朝文学と白楽天、江戸時代に読まれた李白・杜甫など、さまざまな例があげられます。本特集では、こうした、中国文学が日本文学に与えた影響について取りあげます。そして、各記事で取りあげた作品・人物以外にも、多くの人々が漢詩文に親しみ、さまざまな地域に学ぶ場所があったということを左の地図にまとめました。この地図をみて興味を持った方は、お住まいの地域についてもぜひ調べてみてください。



藩校・史跡

a 致道館

b 日新館

c 弘道館

d 足利学校

e 昌平坂学問所（昌平黉）

f 閑谷学校

g 大宰府

h 咸宜園

i 多久聖廟

j 長崎孔子廟

k 至聖廟

※主に関連施設が現存している場所を挙げる

日本の漢詩人

① 阿倍仲麻呂

② 菅原道真

③ 義堂周信

④ 絶海中津

⑤ 一休宗純

⑥ 石川丈山

⑦ 新井白石

⑧ 服部南郭

⑨ 菅茶山

⑩ 頼山陽

⑪ 梁川星巖

⑫ 大槻盤溪

⑬ 积月性

⑭ 大沼枕山

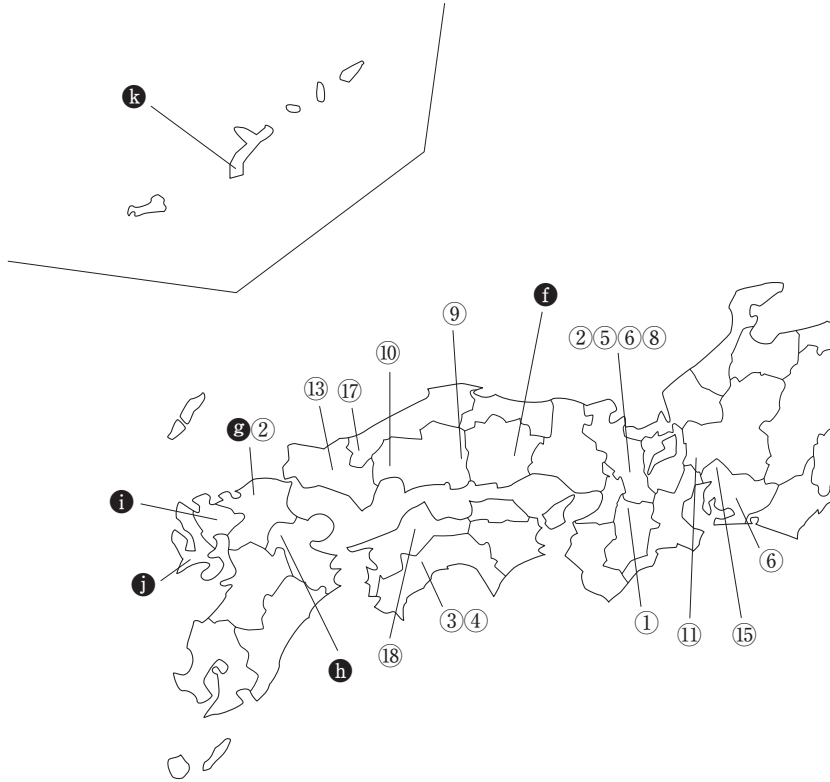
⑮ 森春濤

⑯ 成島柳北

⑰ 森鷗外

⑱ 正岡子規

⑲ 夏目漱石



解説

日本の漢詩人

- ① 阿倍仲麻呂（七〇一―七七〇）奈良時代の人。遣唐使の随員として中国に渡り、唐王朝の官僚として活躍する。詩「銜命使本国」
- ② 菅原道真（八五九―九〇三）平安時代前期の学者、政治家。讒言によって大宰府に流される。詩「不出門」
- ③ 義堂周信（一三五―一三六）室町時代前期の僧。土佐（現在の高知県）の人。詩「対花懷旧」
- ④ 絶海中津（一三六―一四〇五）室町時代前期の僧。土佐（現在の高知県）の人。詩「雨後登樓」
- ⑤ 一休宗純（一三四―一四八）室町時代の僧。京都の人。詩「自贊」
- ⑥ 石川丈山（一五三―一六七）江戸時代初期の漢詩人。三河（現在の愛知県）の人。比叡山の西麓に詩仙堂を築いた。詩「富士山」
- ⑦ 新井白石（一六五―一七五）江戸時代中期の儒学者、政治家。詩「自題肖像」
- ⑧ 服部南郭（一六三―一五九）江戸時代中期の儒学者、漢詩人。京都の人。詩「夜下墨水」
- ⑨ 菅茶山（一七四―一八七）江戸時代後期の儒学者、漢詩人。備後（現在の広島県）の人。私塾「黄葉夕陽村舎」を開いた。詩「冬夜讀書」

- ⑩ 頼山陽（一六〇―一六三）江戸時代後期の儒学者、歴史家。安芸（現在の広島県）の人。詩「題不識庵擊機山図」
- ⑪ 梁川星巖（一七九―一八五）江戸時代末期の漢詩人。美濃（現在の岐阜県）の人。詩「芳野懷古」
- ⑫ 大槻盤溪（一八〇―一八七）江戸時代末期の儒学者。仙台藩（現在の宮城県）の藩校「養賢堂」の学頭。詩「平泉懷古二首」
- ⑬ 釈月性（一八七―一八五）江戸時代末期の僧、漢詩人。周防（現在の山口県）の人。詩「将東遊題壁」
- ⑭ 大沼枕山（一八二―一八九）江戸末期から明治時代の漢詩人。江戸（現在の東京都）の人。詩「東京詞」
- ⑮ 森春濤（一八九―一八九）江戸末期から明治時代の漢詩人。尾張（現在の愛知県）の人。詩「岐阜竹枝」
- ⑯ 成島柳北（一八七―一八四）江戸末期から明治時代の漢詩人、新聞記者。江戸（現在の東京都）の人。詩「火輪車中之作」
- ⑰ 森鷗外（一八三―一九三）明治時代の文学者、医者。石見（現在の島根県）の人。詩「航西日記」所収漢詩
- ⑱ 正岡子規（一八七―一九三）明治時代の文学者。

松山（現在の愛媛県）の人。詩「送夏目漱石之伊予」

⑲ 夏目漱石（一八七―一九六）明治・大正時代の文学者。江戸（現在の東京都）の人。詩「題自画」

藩校・史跡

- a 致道館 庄内藩（現在の山形県）の藩校。
- b 日新館 会津藩（現在の福島県）の藩校。
- c 弘道館 水戸藩（現在の茨城県）の藩校。
- d 足利学校 栃木県にあった学校。中世にはあったとされる。
- e 昌平坂学問所（昌平黉） 江戸幕府の学問所。現在の湯島聖堂。
- f 閑谷学校 岡山藩（現在の岡山県）の学校。
- g 大宰府 七世紀に筑前国（現在の福岡県）に置かれた地方官庁。
- h 咸宜園 豊後国（現在の大分県）に広瀬淡窓により開かれた私塾。
- * 広瀬淡窓（一七二―一八五）江戸時代末期の儒学者、漢詩人。豊後（現在の大分県）の人。詩「桂林莊雜詠 示諸生」
- i 多久聖廟 佐賀県にある孔子廟。
- j 長崎孔子廟 長崎県にある孔子廟。一八九三年に現在の場所に設立。
- k 至聖廟 沖縄県にある孔子廟。

万葉集と隠逸——大伴旅人を中心に

鉄野昌弘
(東京大学)

一、「万葉びと」の隠逸と「故郷」

日本古代における隠逸は、概ね否定的に、その限界を指摘されることが多いようである。例えば、日本における隠逸を広く考察した好著、桜井好朗『日本の隠者』（塙新書、一九六九）は、奈良時代については「観念としての都」という章を立て、『懷風藻』の漢詩人たちについて「彼らの気どりは宮廷生活と表裏の関係にある」「どこまで知的教養の域をこえていたかは疑問である」と論評する。

例えば藤原宇合は、長屋王邸で、「遨遊已得オウユウイデ攀ヤツルツルコトヲコトヲ龍鳳リウホウ、大隠何オホカクレナニ用ヨウ覓ミムルムルコトヲコトヲ仙場センジョウ」などと詠じている（『秋日於ササキニ左僕射長王宅サハクセチウオウタク一イチ宴エンス』）。ここは都だが、長屋王邸は別天地。ここに遊ぶ我々は市中に隠れる「大隠」で、ことさらに仙境を求める必要などないというのである。隠逸への志向は明らかだが、それが意匠でしかないのもまた明白である。宇合が長屋王の変で兵を率いて長屋王邸を包囲したのを見れば、彼の隠逸への志向自体がポーズだったと言わざるを得ない。

『万葉集』に表わされている、藤原氏に圧迫される大伴氏の側も、隠逸に関しては、「憧れや関心があつた」に止まると評価される。彼らの隠逸は反俗的な行為を呼び起こさず、遠き都を恋うる現実主義に帰結する。それは、彼らの拠点が都における宮廷生活にあつたからだ。都とは律令体制の中核であり、そこに自己が繋がることで彼らの生が位置づけられていた、と桜井氏は言う。

確かに彼らの生活の基盤は都にしかなかった。大宰府で、その少式だった小野老は、

あをによし奈良の都は咲く花のにほふがごとく今盛りなり
（巻三・三六）と、平城京の繁栄を讃える著名な歌を詠じ、防人司佑の大伴四綱は、

やすみしし我が大君の敷きませる国の中には都し思ほゆ
（三九）と応じている。その四綱が続けて

藤波の花は盛りになりにけり奈良の都を思ほすや君（三〇）と問うと、帥、大伴旅人は、次のように答えた。

我が盛りまたをちめやも殆とに奈良の都を見ずかなりなむ
(三三)。若返るはずもないこの身、奈良の都を見ずにここで
死ぬのではないかと嘆くのである。

ただし旅人はこの後、若い頃、行幸に従駕して通った吉野
を歌い(三三)、更に

浅茅原つばらつばらに物思へば古りにし里し思ほゆるかも
忘れ草我が紐に付く香具山の古りにし里を忘れむがため
(三三)と歌っている。三三四歌に「香具山の」とあるか
ら、「古りにし里」は、飛鳥・藤原京の地域である。これら
を歌ったのは天平元年(七五)春と見られ、旅人は六五歳、
平城京に移ったのが和銅三年(七二)だから、人生の三分の
二以上を飛鳥・藤原の地で過ごしたのである。旅人の伯父、
御行ら上の世代は、壬申の乱(六六)の際、飛鳥京を死守す
る功績を挙げており、もともと大伴氏の地盤がその辺りに
あったと考えられる。

三三三歌の「古りにし里」は、原文「故郷」である。漢語
「故郷」は、生まれ育った場所を表わす。芳賀紀雄氏は、こ
のフリニシサトは単に古びた里の意ではなく、その漢語の意
味を含んでいただろうと推測する(『萬葉集における中国文
学の受容』塙書房、二〇〇三)。漢語「故郷」をフルサトと
訓読した結果、古代日本では「古びた里」の意で、昔の都を
「故郷」と呼ぶ用法が生じた。『万葉集』では、フルサトと言

えば飛鳥・藤原京の地域を指すのが普通である。旅人の場合、
そこが生まれ育った場所でもあった。旅人は、天平元年の春、
長屋王の変を大宰府で聞いて、平城京に居場所を失ったと感
じ、「故郷」を思ったと考えられる。旅人が大納言となって
帰京した後の天平三年、病床で歌った歌の題詞にも、「在_ニリ_テ
寧_ニ家_ニ思_フ故郷_ヲ歌」とある(巻六・九六・七〇)。

しかし旅人の「故郷」は、飛鳥・藤原京で一定しているの
でもない。上京の際、奈良の家に戻った感慨が、「還_ニ入_リ
故郷_ノ家_ニ即_チ作_ル歌」(巻三・四三・三)と題され、大宰府で主催
した「梅花歌」に付される「員外思_フ故郷_ヲ歌両首」にも、
「都見ば賤しき我が身またをちめべし」(巻五・八四)云々と
あって、「故郷」は奈良の都なのである。「故郷」に「元居た
場所」「本拠」といった第三の用法が存在している。

そしてそのいずれもが畢竟「都」なのであった。そもそも
「古りにし里」と呼ぶこと自体、そこがかつて華やいだ都で
あったことを示す表現である。捨てられ、衰えゆく場所だか
らこそ、「我が盛りまたをちめやも」という嘆老と響き合う。
大宰府で忘れ草を付けて忘れたいと歌い、奈良に戻って「し
ましくも行きて見てしか」(六九)と歌ったように、旅人に
とって、飛鳥・藤原京は既に帰るべき本拠でなかった。

沫雪のほろほろに降り敷けば奈良の都し思ほゆるかも
(巻八・六三)と、都への憧憬を露わに歌ったこともある。芳

賀氏の言うように、旅人にあるのは、基本的に「望京」と呼ぶべき感情である。裏を返せば、中国の知識人が、そこに帰って読書をしながら時を待つ基盤、「田園」が、「万葉び」とには備わっていないかったことになる。

二、「梅花歌三十二首」序の隠逸

ならば『万葉集』における隠逸は、まったく形ばかりのものであろうか。中国のそれとは異なる形で、やはり意味を持つ場合もあったのではなからうか。

天平二年正月十三日、あつま萃^ニ于^ニ帥老^ニ之^ニ宅^ニ申^ニ宴^ニ會^ニ也^ニ。于^レ時初春^ノ令月^ニシテ、氣淑^ク風和^グ。梅^ハ披^キ鏡前^ノ之^ノ粉^ヲ蘭^ハ薰^ニ薫^ニス^ニ珮後之^ノ香^ヲ。加^ニ以^ニ曙^ノ嶺^ニ移^レ雲、松^ハ掛^ケ羅^ヲ而^レ傾^ニ蓋^ヲ。夕岫^ニ結^ニ霧^ヲ鳥^ハ封^レ上^ノ之^ノ穀^ヲ而^レ迷^ニ林^ニ。庭^ニ舞^ニ新^ニ蝶^ヲ空^ニ歸^ニ故^ニ鴈^ヲ。於^レ是^ニ蓋^ニ天^ニ坐^ニ地^ヲ、促^ニ膝^ヲ飛^ニ觴^ヲ。忘^ニ言^ヲ一^ニ室^ノ之^ノ裏^ニ、開^ニ衿^ヲ煙^ニ霞^ノ之^ノ外^ニ。淡^ニ然^ニ自^ニ放^シ、快^ニ然^ニ自^ニ足^リ。若^シ非^ニ翰^ニ苑^ニ何^ニ以^ニ據^ニ情^ヲ。詩^ニ紀^ニ落^ニ梅^ノ之^ノ篇^ヲ。古^ニ今^ト夫何^ニ異^ナナラム^ヲ矣。宜^ニ賦^ニ園^ニ梅^ヲ聊^ニ成^ニ短^ニ詠^上。

大宰府の旅人邸で開かれた梅花を見る宴の歌、三十二首の序である。作者は不記で、山上憶良かとも言われるが、少なくとも主催者旅人の意を体现していることは疑いない。

この序には、多くの漢籍の引用が指摘される。「初春令月、氣淑風和」が、張衡「帰田賦」の「仲春令月、時和氣清」に基づくことは、年号の典拠をめぐる知られるようになった。

それだけではない。「蓋^ニ天^ニ坐^ニ地^ヲ」が『淮南子』原道訓の「以^ニ天^ニ為^ニ蓋^ニ」「以^ニ地^ニ為^ニ輿^ニ」や、劉伶「酒德頌」(『文選』卷四七)の「幕^ニ天^ニ席^ニ地^ヲ」に倣い、「促^ニ膝^ヲ飛^ニ觴^ヲ」が『抱朴子』疾謬篇の「促^ニ膝^ヲ之^ノ狹^ニ坐^ニ、交^ニ杯^ヲ觴^ヲ于^ニ咫尺^ニ」を思わせることなど、既に明らかにされている。そもそも集団詠に序を付すること自体、王羲之「蘭亭序」に始まる詩序に倣うもので、その影響は「忘^ニ言^ヲ一^ニ室^ノ之^ノ裏^ニ」が、「蘭亭序」の「悟^ニ言^ヲ一^ニ室^ノ之^ノ裏^ニ」のもじりであることにも表れている。「加^ニ以^ニ」「於^ニ是^ニ」等によって文を繋ぎ、最後を「宜^ニ賦^ニ園^ニ梅^ヲ聊^ニ成^ニ短^ニ詠^上」といった詠作の呼びかけで結ぶ構成は、初唐王勃の詩序群に拠ると思われる(小島憲之『上代日本文学与中国文学』中、塙書房、一九六四)が、その王勃も「蘭亭序」を強く意識し、その表現を踏まえるのであった。

挙げたような漢籍が、概ね老荘思想を中心とし、隠逸を志向していることは明らかであろう。張衡は腐敗した官界で志を得ず、田園に帰ることを願った。劉伶は「清談」に耽った「竹林の七賢」の一人であり、旅人は「讃^ニ酒^ニ歌^ニ」に、

古^ノの七^ノ賢^ノしき人^ノたちも欲^ハりせしものは酒^ニに^ニしあるらし(卷三・三)と彼らを歌っている。そして王羲之もまた隠逸者であった。『晋書』卷八〇によれば、羲之は若い時から声望高く、自恃もあつたが、やがて都に居るのを不本意に思い、自然の美しい会稽で生涯を送る気になった。そこには孫綽・

許詢・支遁ら文学に秀でた名士たちも住んでおり、彼らを集めて開いたのが「蘭亭の会」（永和九年〔三五〕）である。そこは「故郷」でこそないが、自分たち固有のテリトリーであった。魏晋南北朝の混乱期には、そうした高踏的な生活が、現実的な処世でもあったと考えられる。

一方、旅人たちは、官命で大宰府に下っているものであり、旅人などはまことに不本意であっただろう。彼は「鄙に放たれた貴族」（益田勝実『火山列島の思想』筑摩書房、一九六八）である。彼らが「詩紀落梅之篇」と称して做うのは、北方で雪を見ながら故郷の梅を思う楽府「梅花落」であつた。辺境において、官舎を蘭亭に見立て、そこが理想境であるかのように述べれば、その隠逸は、自ずから王羲之とは全く別の意味を持つてくるだろう。

「梅花歌三十二首」は、大宰府に居た府や西海道諸国の官人たちを一堂に集め、その歌一首ずつを並列する。それは一見、「蘭亭の会」に似ている。しかしその配列は、完全に位階順なのであつた。主客大式紀男人を筆頭に、憶良ほか五位以上の官人六人、造観世音寺別当満誓、主人旅人、六位以下の官人の順で、同じ位階なら府が先、諸国が後である。脱俗どころか、官界の秩序がそのまま持ち込まれているのである。前年に長屋王が誣告によって自尽した後であれば、この大宰府の「令」「和」は、都から遠く隔たっているからこそ享

受しうるのもある。したがって、「梅花歌」は、やはり乱世に対応する隠逸の文学と見ることが出来る。ただそれが九州一円の総力を結集して作られることで、一種の政治運動の趣を呈しているのである。

前年十月、旅人は、藤原房前に対馬産の梧桐で作った琴を贈り、それに一篇の夢幻譚を添えた。この琴が夢に出て来て、「自分は遙島で隠逸の生活を送りつつも、このまま空しく谷に朽ちることを恐れていた。幸いに名匠に出会って琴に作られたからには、音の分かる君子の琴になりたい」と言つたと（巻五・八〇〜）。その琴は旅人自身であり、房前に誼を通じつつ、中央政界への復帰の希望を伝えたと考えられる。

「梅花歌」はそれに続いて、都の風流を志向しながら、ここに対峙するものである。漢詩ならぬ和歌であるのが一つのポイントであろう。和歌は辺境の国、日本の詩形であり、中国の詩に倣いつつも独自性を主張する文芸であつた。それは辺境大宰府を拠点にする文学として相応しく、また詩に拠る藤原氏（不比等・房前・宇合・麻呂は『懷風藻』作者。武智麻呂も『家伝』に「吟詠詩書」と記す）への対抗軸となる。中国の隠逸者たちは、自らの「田園」、根拠地にあつて粘り強く乱世に対処した。旅人はついにそうした場所を持ち得なかつたけれども、詩人たちの、そのようにしたたかな精神をこそ受け継いだと考えるのである。

『源氏物語』と「長恨歌」「長恨歌伝」

きのしたあやこ
木下綾子

(聖学院大学)

白居易(七七二―八四六)の『白氏文集』は、記録によれば九世紀半ばの仁明朝、作品の影響関係からはすでに嵯峨朝にはわが国に渡来していた^(注1)『詩経』の伝統に連なる政教主義的な諷諭性^(ふうゆせい)と、他方の日常性・自照性が人気を博して大流行するが、本質的な理解と受容という点では、紫式部の『源氏物語』が随一と評価されている^(注2)。『源氏物語』の政治・歴史批判、女性の定めがたい運命という主題は白氏の諷諭詩に学んだものである。また、実際に、紫式部は諷諭詩の代表作である「新楽府」五十首を中宮彰子に三年以上かけて進講しており、造詣の深さが窺える(『紫式部日記』)。ここでは、『源氏物語』に最も影響を与えた「長恨歌」(巻十二・〇五九六)を中心に、『源氏物語』における『白氏文集』の受容を考えてみたい。

「長恨歌」と「長恨歌伝」

「長恨歌」(以下「歌」)は、元和元年(八〇六)十二月、

白居易と陳鴻^{ちんこう}、王質夫が仙遊寺に遊んだ際、唐を壊滅状態にまで至らしめた安史の乱(七五五―七六三)や、その発端である玄宗皇帝の楊貴妃寵愛に話が及び、一同感嘆したことから作られた。まず白居易が詩として詠じ、その後、陳鴻が「長恨歌伝」(以下「伝」)を付したという。

「歌」と「伝」は韻文と散文という形式だけでなく、内容が大きく異なっている。たとえば、「歌」は主人公を「漢皇」、つまり漢の武帝(前一五六―前八七)に仮託し、深窓の令嬢「楊家女」との運命的な出会いを描く。それに対して、「伝」は史実を踏まえながら、かつて名君であった「玄宗」が政治に飽き、寵愛の皇后や妃を亡くし、息子寿王の妃であった楊貴妃を奪ったと記す。

続いて、「歌」では女の艶麗な美、春を背景とした恋の楽しみ、戦乱の勃発から女のやむない処刑と儚く美しい死、秋を背景とした男の切々とした悔恨の情を歌う。その上で、武帝が亡き李夫人の魂を道教の方術士に呼び出させた故事にな

ぞらえて、男が方術士の力を借りて仙界において転生した王妃を探し出す。愛の言葉を得るものの別離し、永遠に「長恨」、痛恨の思いが続く、と悲恋の美しさを謳い上げている。

一方、「伝」では楊貴妃も容色と才知、弁術によって寵愛を得て親戚たちの専横を招き、ついには又従兄弟の楊国忠が宰相となったことで安祿山が討伐のため挙兵した、とされている。処刑については、楊国忠の礼に則った覚悟の死を劇画的に描くことで楊貴妃の混乱を引き立たせる。仙界の場面では史実から離れるが、王妃の妃らしい毅然とした態度とまた裏腹な玄宗への強い執着、ひいては寿命のコントロールなど、楊貴妃を徹底的に悪女として描く。

主題については、「伝」が「歌」に関して「尤物を懲らしめ、乱階を望ぎ、将来に垂れんと欲するなり」（絶世の美女をこらしめ、世の乱れを防ぎ、将来の戒めとしようとした）と諷諭性を指摘している点が議論を呼んできた。「尤物」は男性を惑わせる美女の意であり、先に挙げた諷諭詩「新樂府」のうち「李夫人」（巻四・〇一六〇）において李夫人を指し、諷諭の意が込められている。しかし、「歌」は『白氏文集』の分類上、「諷諭」があるにも拘わらず「感傷」に入れられている。この「歌」と「伝」は、『白氏文集』の編纂にあたり、白居易自身の意思で「伝」が「歌」の序文として収められ、一組の作品として読まれてきた。^(注3)このことから、

「歌」は「伝」に諷諭を任せて愛情を謳ったという説や、「伝」を併録した意義を重視すれば諷諭の意図があったという説がある。^(注4)後者を支持したい。

『源氏物語』における受容

『源氏物語』の受容の方法として重要なのは、第一に、光源氏の父の桐壺帝と母の桐壺更衣による悲恋物語において「歌」「伝」の両方が引用される点である。

桐壺帝が後ろ盾のない桐壺更衣を寵愛したことに対して、「上達部、上人（公卿、殿上人）なども、あいなく目をそばめつつ」（桐壺巻）と非難する様子が描かれるが、これは「伝」で官僚たちが楊一族の専横を蔑む「目を側つ」による。次いで「唐土にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れあしかりけれ」と天下の人々が噂し、「楊貴妃の例」がささやかれる。「伝」は宮廷社会の人々による政治批判の視点から用いられるといえよう。

対して、桐壺帝の側からは「歌」が用いられる。更衣が亡くなり、桐壺帝の悲嘆は「歌」と同じく秋の風景とともに語られる。勅使として更衣の母君を訪ねた鞍負命婦は「御形見」に衣装や整髪具、装飾品を託される。桐壺帝は「長恨歌の御絵」について女房たちと語り、自らを「漢皇」に重ねて、「亡き人のすみか、たづね出でたりけむしるしの釵ならまし

かば」と更衣を悼む歌を詠む。

たづねゆくまぼろしもがなつてにても魂^{たま}のありかをそこ
と知るべく

「まぼろし」は「歌」で玉妃を見つけ出した方術士のこと、更衣の行方を知りたいという叫びである。帝は悲しみで「朝政」を怠りがちとなり、周囲の人々からはまた「伝」の視点から「他の朝廷の例までひき出で」て非難する。

桐壺帝に寄り添うばかりでない『源氏物語』の厳しい現実感覚が示されているといえよう。

第二に重要なのが、「形見」「形代^{かたしろ}」である。「歌」「伝」では生まれ変わりの玉妃が登場したが、『源氏物語』では「形見」の子や容姿のよく似た「形代」が出てくる。

まずは、桐壺帝が命婦を遣わした本当の目的は「形見」の若宮、のちの光源氏を引き取るためであったことを指摘しておきたい。桐壺帝はこの若宮を更衣や父大納言の志に応えるために即位の道に乗せようとするが叶わず、のちに冷泉帝でその思いを叶える。

更衣によく似た「形代」、藤壺は桐壺帝の「長恨」を癒す反面、「形見」の光源氏に叶わない恋心という新たな「長恨」を生じさせ、新たな「形代」紫の上を得させるものの、秘密の子、冷泉帝をなすに至る。この秘密の子と光源氏との酷似は、藤壺にとって密通の罪の刻印にほかならない（紅葉賀

巻）。一方で桐壺帝にとっては立坊と即位を決めさせ、光源氏には罪と桐壺帝の愛情を再確認させ、また准太上天皇という栄華の道を拓くものとなる。

そして、光源氏は人生の終幕で紫の上を亡くし、父の桐壺帝を追うかのような歌を詠む^(注5)（幻巻）。

大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬ魂^{たま}の行く方^ゆたづねよ

このように、『源氏物語』における「歌」「伝」は、「形見」「形代」の連鎖が美や愛情の再確認となりつつ罪の刻印にもなり、作中人物の人生を導き、展開させているのである。

〔注1〕太田晶二郎「白氏詩文の渡来について」（『太田晶二郎著作集』一、吉川弘文館、一九九一年）、小島憲之『上代日本文学与中国文学』下（塙書房、一九六五年）

〔注2〕丸山キヨ子「源氏物語と長恨歌」（『源氏物語と白氏文集』東京女子大学学会、一九六四年）、新間一美「白居易の長恨歌―日本における受容に関連して」（『白居易研究講座』二、勉誠社、一九九三年）／『平安朝文学と漢詩文』和泉書院、二〇〇三年、長瀬由美「中唐白居易の文学と『源氏物語』―諷諭詩と感傷詩の受容について・『源氏物語』と『長恨歌』―正編から続編へ」（『源氏物語と平安朝漢文学』勉誠出版、二〇一九年）

〔注3〕下定雅弘「長恨歌―楊貴妃の魅力と魔力」（勉誠出版、二〇一一年）。「長恨歌」「長恨歌伝」の本文も本書に拠る。

〔注4〕前者の説は注3下定著書、後者の説は注2丸山・新間・長瀬論。

〔注5〕日向一雅「源氏物語の世界」（岩波新書、岩波書店、二〇〇三年）

日本語の中の漢文に気づく 「多読」の授業

大栗真佐美

(京都教育大学附属桃山中学校)

一、授業のねらい

日本語の仮名の由来を小学校六年で学びます。しかし、学習しても自分が現在使用している日本語は昔も今も同じだと考えてしまいがちです。漢文を見ても、日本語だと気づく機会は少ないのです。

そこで、本校では漢文の授業を行う前後に漢文とつながりのある作品を学べるように、年度当初にカリキュラムマネジメントを行い、多くの作品を読むようにしています。日本語の中には漢文が溶け込んでおり、切り離せないものだとし、時代を超えて生き続けている漢文の価値を見いだすことによって、伝統的な言語文化の継承を認識させる機会としたいからです。

二、授業の方法(教材)

漢文教材はどの教科書も一学年一教材程度です。学習指導要領(平成二九年度告示)では、「古典には様々な種類の作品があることを知る」と、「現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、古典

に表れたものの見方や考え方を知ること」、「歴史的背景などに注意して古典を読むこと」を通して、その世界に親しむこと」などがありますが、これらを学ぶ時間はあまりにも少ないのです。

そのため、授業の導入に期間を決めて五分程度「帯教材」を使って多読しています。

一年では、教科書掲載の故事成語と発展学習として「守株」を典拠「韓非子」を使って、返り点や送り仮名等を学びました。

二年では、帯教材で『論語』三〇章句を学び、漢文『論語』季氏篇「益者三友、損者三友」と古文「徒然草」一一七段「友とするにわるき者」の授業をつなげて、二つの古典の類似性を学ぶことで、時代を超えた古典の継承を実感する機会としました。

三年では、帯教材で「漢詩」二〇首を読み、教科横断的な学習として、美術科で「漢詩の風景」を描きました。また、古文「おくのほそ道」を学ぶ際、原文の紀行文全体に流れている漢語調や典拠となる漢詩文に

ついてまとめ、作品の特徴として紹介しました。二年で学んだ『論語』の一節「剛毅木訥」「李白の「春夜桃李園に宴するの序」の「光陰は百代の過客なり」が引用されていることなどです。

三、生徒の反応

生徒は学習を通じて、日本には文字があったことや、漢文を通して日本語が生まれ、漢文と古文が根底でつながっていることを知っています。『おくのほそ道』の振り返りには、A「日本と中国の文学は深く関わり合い、論語や漢詩などを活用している」、松尾芭蕉はすぐく勉強して書いたんだなど感じた。B「李白も杜甫も場所も年代も離れているのに文章が(日本に)伝わっているのがすごい」、C「日本文学に漢詩が関わっていることは知っていたが、『おくのほそ道』とは思ってもよらなかった」、D「多くの漢文を読んだので読むことに慣れてきた」等が書かれていました。

これらのことから、時代を超えて日本語の中に生き続けている漢文の価値を見いだしていると感じています。漢文の価値に気づき、高校や生涯学習への学びにつなげるかせるために、多くの作品に触れる機会をもつ「多読」の授業を心がけています。

『雨月物語』『吉備津の釜』と中国文化

近衛典子
(駒澤大学)

江戸時代中期に成立した上田秋成の怪談集『雨月物語』は、中国白話小説の影響を強く受けた小説の一ジャンルである読本を代表する作品の一つである。死を以て男同士の約束を守り抜く「菊花の約」、夫を待ち続けた妻が亡霊となって夫と再会する「浅茅が宿」など、怪奇と幻想に満ちた短編九編を収めるが、中でも「吉備津の釜」の恐ろしさは江戸怪談中の白眉と言っても過言ではない。

「吉備津の釜」は、吉備国（現岡山県）の吉備津神社の釜占いを物語の大枠とする。婚約が相整った娘の父親が、なお幸いを祈って釜占いをしたところ「凶」と出たが、それを無視して結婚を強行したために起こった悲劇を描いた作品である。主人公の正太郎は貞淑で舅姑によく仕える理想的な妻磯良を疎んじ、遊女袖と馴染んで、ついに磯良を手ひどく裏切り袖と駆け落ちした。しかし間もなく袖は変死する。陰陽師の占いによれば袖の死は磯良の生き霊によるもので、磯良は今や死霊となって正太郎の命を狙っているという。正太郎は

陰陽師の言に従い四十二日間の物忌みに籠もったが、ようやく忌みが明けたと思いい戸を開けたその瞬間、正太郎の悲鳴が響き渡った。正太郎の遺体はどこにも無く、室内の壁には血が注ぎ、軒先には髻だけが残っていた、というストーリーである。

タイトルからもわかるように、この作品の結構を支えるのは吉備津神社の霊験である。しかし物語末尾に「されば陰陽師が占のいちじるき、御釜の凶祥もはたがはざりけるぞ、いとまたふとかりける」と言うように、陰陽師の占いも重要なファクターとなっている。そして実は、この陰陽師の描写には江戸時代に流入してきた新しい中国文化が反映していると考えられるのである。

「篆籀のごとき文字」と「朱符」

陰陽師は魔除けのために正太郎の全身に「篆籀のごとき文字」を書き、また亡霊の侵入を防ぐため「朱符」を全ての戸

に貼るように教えた。「篆籀のごとき文字」も「朱符」も、「吉備津の釜」が典拠としたと考えられる、『剪燈新話句解』^{（注1）}所収「牡丹燈記」の語句をそのまま利用したものである。では、当時の日本の読者はこれらの語から、いったい何を想起したのであるうか。もし注釈を付けるとすれば、どのように書くのがふさわしいであろうか。

身体にくまなく呪文を書いて魔物から身を守るという場面は、後年の小泉八雲の「耳なし芳一」を髣髴とさせる。しかし「耳なし芳一」、及びその原拠となった中世説話においても、身体に書かれるのはお経であり、中国古代の書体を表す「篆籀のごとき文字」とは根本的に異なる。篆書と言えども現代においても印章の字体として身近であるが、およそ判読し難い文字であって、ここでは「訳のわからない装飾的な文字」と理解するのが妥当であるように思われる。また、「朱符」は中国では文字通り「赤い札」を指すが、『雨月物語』の主だった注釈書を紐解けば「朱で書いた護符」と注されている。日本ではまず神聖なる札として「白い紙」を連想、そこに「赤い文字」が書かれた、何やら怪しげなお札、というのが自然な発想だったのではないか。いずれにしても、珍奇にしておどろおどろしいイメージを掻き立てる文物であるが、ここに、現在ではほとんど廃れてしまった「鎮宅靈符神」^{（注1）}信仰なるものを想定することが可能ではないかと考えている。

鎮宅靈符神信仰と妙見信仰

坂出祥伸氏の『日本と道教文化』によれば、中国において北天の守護神である玄武神を祀る鎮宅靈符神信仰が、中国の元・明に当たる鎌倉・室町時代に日本に伝来、北斗星を信仰するという類似性から日本古来の妙見信仰と習合し、広まっていたと推測されている。^{（注2）}確かに妙見信仰は古くからあり、盛衰はありながらもずっと信仰されてきた。しかし、一般庶民にまで妙見信仰が広く流布し、それとともに鎮宅靈符神信仰も広まっていたのは江戸時代からのことと考えてよい。そこには一六四四年の中国・明の滅亡に伴って多くの遺臣たちが日本に亡命してきた影響があったと考えられる。彼らが江戸の人々にとつて目新しい、道教の色合いの強い中国文化を日本にもたらしたのである（図参照）。

秋成は生まれも育ちも大坂なので、今、『雨月物語』が成立した明和五年（一七六八）前後の上方（大坂・京都）の文化状況の一端を、大坂郊外の能勢妙見山の事例に見てみたい。能勢氏の氏寺であったこの妙見山が「能勢の妙見さん」として広く信仰されるようになったのは、まさにこの頃であった。明和三年、ここの霊像が京都の中立売愛染寺で一週間の出開帳となり、また門跡寺院である瑞龍寺の宮様の信仰も厚く、三日間その御殿内で衆人の参拝が許された。その二年後、

『雨月物語』成立の年には女人禁制が解かれ、大いに賑わったという。そして安永元年（一七七二）には大坂市中で初の講社が作られた。^{注3}つまり、明和から安永にかけて、上方に能勢妙見の一大ブームが巻き起こったと考えてよいであろう。

妙見信仰の隆盛

能勢とは別の事例であるが、妙見信仰の賑わいが幕末まで続いたことは、自身が妙見の信者であった田中華城の慶應二年（一八六六）の序を持つ『大阪繁盛詩後編』巻之中に記さ



図 鎮宅靈符の掛軸（右）および部分拡大（左）

れている。道頓堀とは目と鼻の先の千日前にあった自安寺について、北辰星を祭っており靈符神と称すること、元は寥々たる尼寺であったが、明和年中に奇瑞があつて盛んになり男寺となつたこと、歌舞伎役者や娼妓の信仰が厚いこと、縁日には多くの出店や芸能で賑わい参道を埋め尽くすほどであったことなどが詳細に描かれている。ここでも「明和」の年号が見られることが留意される。妙見さんが役者や遊女に人気だったのは、「妙なる見目」を願うからでもあった。

鎮宅靈符神は今現在ほとんど知られていない。明治の廃仏毀釈において邪教と見なされ、多くの靈符社が滅却されたからである。しかし、近世中後期の妙見信仰の例は他にも多々挙げることができる。秋成は「吉備津の釜」において、すさまじい磯良の襲撃に対峙する方法として、当時実際に人々の間に広まりつつあった、不気味ながらもいかにも効力のありそうな中国的呪符をさりげなく描き込んだのであった。

（注1）近衛典子『上田秋成新考―くせ者の文学―』第三章『雨月物語』の当代性―夢占と鎮宅靈符―（ぺりかん社、二〇一六年）。

（注2）坂出祥伸『日本と道教文化』／角川選書／角川学芸出版、二〇一〇年。

（注3）『妙の見山』（能勢妙見堂、一九〇三年）、山田文造編『東郷村誌』（大阪府豊能郡東郷村長・山田四郎、一九一六年）等参照。

江戸漢詩における李白・杜甫の受容

鈴木 健一
(学習院大学)

隅田川を小舟で下る——服部南郭

古代精神を体得するために古代のことばを探究した古文
派の泰斗^{おきゅう}荻生徂徠^{そらい}の教えを作詩の上で最もよく実践した門人
は、十八世紀前半に活躍した服部南郭^{はっとりなんかく}（一六三一—一七五九）だった。
『唐詩選』の流行に大きく貢献したのも南郭である。その代
表作「夜、墨水を下る」を見よう。「墨水」は隅田川、「金龍
山」は待乳山^{まつちやま}聖天宮^{しょうてんぐう}である。

金龍山畔江月浮	金龍山畔江月浮かぶ
江揺月湧金龍流	江揺らぎ月湧いて金龍流る
扁舟不住天如水	扁舟 ^{とと} 住まらず天水のごとし
兩岸秋風下二州	兩岸の秋風二州を下る

(南郭先生文集初編)

金龍山のほとりを流れる隅田川には月が浮かんでいる。川
面が揺らぎ、月の光が水底から湧き上がるかのように輝いて、
まるで黄金の龍が泳いでいるようだ。私の乗った小舟はとど
まることなく進み、天は水のように澄んでいる。兩岸を秋風

が吹き渡る中、武蔵・下総両国の間を下っていくのである。

ここには、たくさんの唐詩の表現がちりばめられている。
「江揺らぎ月湧いて」は、杜甫「旅夜懷ひを書す」の「月涌
いて大江流る」を、「天水のごとし」は、趙嘏^{ちやうか}「江樓にて
感を書す」の「月光は水のごとく、水は天に連なる」を、
「二州を下る」は李白「峨眉山月の歌」の「君を思へども見
えず、渝州^{ゆしゅう}に下る」をそれぞれ踏まえているのである。三
首とも『唐詩選』に収められている。

全体として、川面に月が浮かぶ大らかな景観を唐詩から学
んでいると言えるのではないか。その中で、「金龍山」とい
う実在の江戸の地名から黄金の龍という発想を得て、展開し
ていくところに南郭の工夫がある。李杜らに学ぶということ
は、日本人による中国文化の摂取であるわけだが、その一方、
日本の風景を対象とすることで、中国的なありかたは結果的
に日本化していった。文化の交流は常に相互交通的なのであ
る。

月に対して一人酒を飲む——菅茶山

十八世紀の中頃から後半にかけて、日本ではむしろ宋詩に関心が集まるようになる。備後で私塾廉塾を開いた菅茶山（二五八—一三三）も、平明で写実的な宋詩の世界に親しんだ。その茶山にも、李白を意識した作はある。李白には「月下の独酌」という詩があり、茶山はそれを踏まえて同題の詩を詠じている。まず、茶山の詩を掲げる。

旧友不知衰老日

旧友は知らず衰老の日

新交何識少年時

新交は何ぞ識らん少年の時

孤斟対月傷今昔

孤斟月に對して今昔を傷めば

影落愁人掌上卮

影は落つ愁人掌上の卮

（黄葉夕陽村舎詩遺稿）

昔の友人たちは知らない、私が年老いた今の姿を。最近知り合った若い人たちはどうして知っているのか、私の若い頃を。一人で酒を飲みながら、月に向かつて今昔に思いを馳せ感傷的になっていると、月光は愁いに耽る私の掌中の盃に差し込んでくる。

昔の友人、今の知り合い、どちらも自分の人生のすべてを知っているわけではないという点に、作者の深い孤独がある。それをずっと見つめてくれているのは月だけなのである。

李白の方は「花間一壺の酒／独酌相親しむ無し／杯を挙げて明月を邀へ／影に対して三人と成る／月既に飲むを解せ

ず／影は徒らに我が身に随ふ／暫く月と影とを伴ふ／行業須らく春に及ぶべし／我歌へば月徘徊し／我舞へば影零乱す／醒むる時同に交歓し／酔ひし後各分散す／永く結ばん無情の遊／相期す雲漢の邀かなるに」（唐詩三百首）とある。孤独さを噛みしめつつ月を友として酒を飲むという点で両者は共通する。ただし茶山は、今と昔の友を対比し、人生全体を振り返るという点が独自である。

そして、李白「月下の独酌」は、私が歌うと月も空中をさまよい、私が踊ると影もゆらゆら揺れるという表現が明い。対して、茶山の方は、結句で月光が私をひそやかに慰めてはくれるが、しかし一首全体としては深い憂愁に包まれている。

奥州藤原氏を懐かしむ——大槻磐溪

大槻磐溪（一六〇一—一七）は、蘭学者大槻玄沢の子で、昌平黌で学び、仙台藩に仕えた。その詩「平泉懷古」を読む。

三世豪華擬帝京

三世の豪華帝京に擬し

朱楼碧殿接雲長

朱楼碧殿雲に接して長し

只今唯有東山月

只今唯東山の月有るのみ

来照当年金色堂

来り照らす当年の金色堂（磐溪詩鈔）

奥州藤原氏三代の豪華な文化は、京都のそれに擬えることができるほどで、朱塗りの楼閣やみどりの御殿は雲に接するかのようにな々と聳え連なる。今はただ、東山の月があるだ

けである。月光が照らしている、当時の面影を残す金色堂を。

この詩が踏まえる、李白の「蘇台覽古」（『唐詩選』所収）はこうだ。

旧苑荒台楊柳新

旧苑 荒台 楊柳 新たななり

菱歌清唱不勝春

菱歌の清唱 春に勝へず

只今惟有西江月

只今 惟 西江の月有るのみ

曾照吳王宮裏人

曾て照らす 吳王宮裏の人

こちらは中国春秋時代の吳王夫差（越王句踐に滅ばされた）への懷古を詠む。その宮殿姑蘇台の美女を照らすのは西江の月である。

磐溪の軋句「只今唯 東山の月有るのみ」は李白の「只今惟西江の月有るのみ」を踏襲し、結句も月が「照らす」ところは同じである。つまり、

吳王夫差——姑蘇台——西江の月

奥州藤原氏——金色堂——東山の月

というように対応させて、中国的な光景を日本のそれに移し替えているわけだ。李白の方は青々と芽吹く柳や菱の実採りの歌声、美女（西施）などさまじまに配しているが、磐溪は建造物に焦点を絞っている。日本漢詩は、中国漢詩ほどの優艶さには乏しいように感じるし、実際奥州藤原氏や金色堂には西施に対応する美女は見出せないということもあろう。

安政の大地震に遭う——大沼枕山

最後に、大沼枕山（一八六〇—九）が安政の大地震について詠んだ詩における杜甫の影響を見てみたい。「十月二日震災、事を記す」八首のうちの一首である。

千家一瞥忽為煙

千家一瞥 忽ち煙と為る

烽火官来巡路辺

烽火の官来つて路辺を巡る

大地揺揺余震在

大地 揺揺として 余震在り

知他乗馬似乗船

知んぬ 他の馬に乗るは船に乗る

に似たるを

（枕山詩鈔二編）

たぐさんの家があつという間に燃えてしまい、火事場見廻役がやって来て道端を見回る。大地がゆらめき動いて余震があり、役人は馬に乗っているのだが、船に乗っているかのようにつらつて見えるのももつともだ。

結句は、杜甫の「飲中八仙歌」（『唐詩選』所収）の「知章が馬に騎るは船に乗るに似たり」を意識した表現である。杜甫の方は、賀知章（盛唐の詩人。杜甫より五十三歳年上で、「飲中八仙」の一人。李白を見出した）が酒に酔っているため馬に乗っているさまがゆらゆらとして、まるで船に乗っているかのように見えるということだが、それを馬に乗った役人が地震のため船に乗っているかのようにふらついていると転換したところに、枕山の機知が感じられる。

中国・日本関係年表

中国古典の影響

監修…菊地隆雄

※高等学校で学習するものを中心に掲載

『今昔物語集』

説話集。震旦部に中国の奇譚を収録。

藤原俊成女

『無名草子』↑『列仙伝』

『平家物語』↑『論語』『孟子』『漢書』『白氏文集』など

兼好法師

『徒然草』↑『論語』『老子』『文選』『蒙求』など

『太平記』↑『枕中記』『白氏文集』など

『邯鄲』（能）↑『枕中記』

『楊貴妃』（能）↑『長恨歌』

林羅山

『怪談全書』↑『搜神記』『太平広記』『剪刀新話』など

浅井了意

『伽婢子』↑『剪刀新話』など

松尾芭蕉

『奥の細道』↑李白「春夜宴桃李園序」、杜甫「春望」、『莊子』『夢為胡蝶』

都賀庭鐘

『英草子』↑白話小説集『今古奇観』など

上田秋成

『雨月物語』↑『剪刀新話』『今古奇観』など

曲亭馬琴

『南総里見八犬伝』↑『水滸伝』『三国志演義』

▲前 700		▲前 500		▲紀元		▲600		▲500	
春秋		戦国		秦		前漢		後漢	
『詩経』・孔子・孟子・莊子・韓非子		『史記』・『漢書』・陶潜		三国		西晋		東晋	
南北朝		隋							

十七条憲法

「以和為貴」↑『論語』

『懷風藻』

日本最初の漢詩集

阿倍仲麻呂

唐に渡り、要職につき、文人たちと交流。

『万葉集』↑『詩経』

『古今和歌集』序↑『詩経』序、『詩品』序

紀貫之

『土佐日記』↑李白『贈汪倫』

清少納言

『枕草子』↑『史記』『鶏鳴狗盗』、白居易

「香炉峰下、…」

紫式部

『源氏物語』↑白居易「長恨歌」

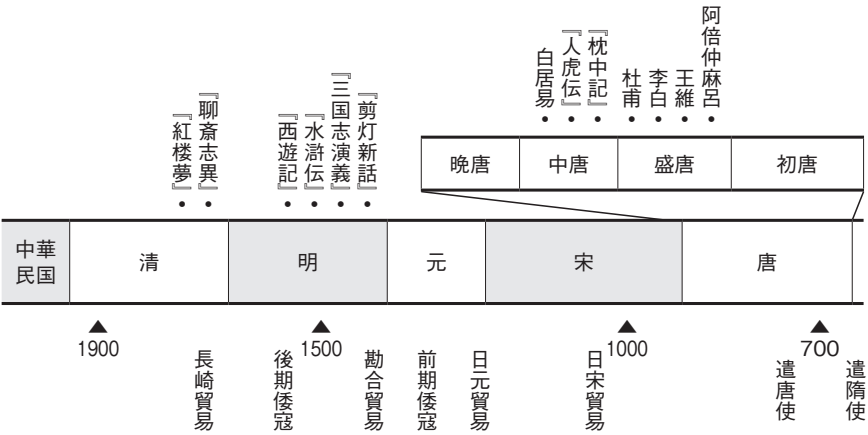
『和漢朗詠集』

漢詩、漢文、和歌について、朗詠に適したものを選んだ歌謡集。

菅原孝標女

『更級日記』↑「長恨歌」

『大鏡』↑「長恨歌」ほか



昭和	大正	明治	江戸	室町	鎌倉	平安	奈良	
・太宰治	・中島敦	・芥川龍之介	・林羅山・浅井了意 ・松尾芭蕉 ・都賀庭鐘 ・上田秋成 ・曲亭馬琴	・「邯鄲」(能) ・「楊貴妃」(能)	・「無名草子」 ・「平家物語」 ・兼好法師 ・「太平記」	・「古今和歌集」 ・紀貫之 ・清少納言 ・紫式部 ・「和漢朗詠集」 ・「更級日記」 ・「大鏡」 ・「今昔物語集」	・「懷風藻」 ・「万葉集」	・十七条憲法

- 「怪談牡丹燈籠」(落語)
↑「剪灯新話」(『伽婢子』より)
夏目漱石
『草枕』↑陶潜「飲酒」
幸田露伴
「運命」↑「明史」
芥川龍之介
「黄梁夢」↑「枕中記」、『杜子春』↑
「杜子春伝」、『酒虫』↑「聊齋志異」
中島敦
『山月記』↑「人虎伝」、『李陵』↑
『史記』、『弟子』↑「論語」
太宰治
「清貧譚」竹青↑「聊齋志異」
*短歌や童謡に再生する漢詩漢文
□正岡子規「竹乃里歌」(歌集)↑杜甫
「石壕吏」(新婚別)
□会津八一「鹿鳴集」(歌集)↑耿漳「秋
日」
□北原白秋「まちぼうけ」(童謡)↑「韓
非子」『守株」
*漢詩の訳詩集。練り上げられた訳文が特徴。
□土岐善麿『鶯の卵』
□佐藤春夫『車塵集』『玉笛譜』
□井伏鱒二『厄除け詩集』

中島敦と漢文学

「山月記」で知られる中島敦（一九〇九～四二）は、漢文学の高い素養を持つ作家の一人に数えられる。祖父の中島撫山は埼玉の久喜に漢学塾を開き、地域の教育に貢献した。父の田人は漢文の教師で、親族にも漢学者が多く、伯父の斗南（端）は羅振玉と親交のあった漢学者、玉振（疎）は甲骨文の研究者、叔父の比多吉は清の皇帝溥儀の通訳をしていた。

敦の中国古典に取材した小説とその主な典拠を挙げてみよう。「山月記」は唐代の伝奇小説「人虎伝」（李景亮）、「弟子」は『論語』、「名人伝」は『列子』、「盈虚」（李景亮）、「牛人」は『春秋左氏伝』（以下、『左伝』）、「李陵・司馬遷」（※）は『漢書』である。他には「わが西遊記」もある。

こうして見ると、敦は漢学の家系に育つたために中国古典に取材した作品を多く書いたように思える。漢詩も三七篇残しており、生育環境が影響していることはたしかだが、一方、敦の関心は多岐にわたっており、中国古典に関係しない作品も多い。イギリスの作家、R・L・ステイヴンソンのサモア

での晩年を描いた「光と風と夢」、アッシリアの楔形文字の話を書いた「文字禍」、エジプトのミイラの話を書いた「木乃伊」、さらに自身の体験に基づいた私小説風の「狼疾記」「かめれおん日記」などもある。これらを見ると、敦が特に中国古典だけに強く惹かれていたとは言えないだろう。

実は、敦は少年時代を京城（ソウル）で過ごしたこともあって、植民地問題に関心を持っており、またこの時代の青年の常として政治・社会に対する関心も持っていた。昭和一六年には、事実上の植民地であった南洋群島を管轄する南洋庁（パラオ）に赴任し、日本の圧政を見ることになった。翌年、日本に戻ってからは、検閲に引掛からないようにしながら圧政を批判する「ナポレオン」などの南洋ものも書いている。敦が中国古典に取材した小説を集中的に書いたのがこの時期であることに鑑みると、中国古典は、小説の時空を現代から移して検閲を逃れるための隠れ蓑でもあったと言える。もっとも、それは漢文学の素養がなければできないこ

やました まさふみ
山下真史

（中央大学）

とである。とすれば、敦は漢文学によって現代の問題を考え、小説化できたと言えるかもしれない。政治・社会についてはもちろんのこと、人間存在について、文化についてなど、漢文学は格好の素材を提供してくれる宝庫であったのだろう。今回は孔子と子路を描いた「弟子」を見てみよう。

*

敦は、昭和一七年三月、赴任先のパラオから帰国すると、深田久彌きゅうやに預けておいた小説がすでに「文学界」に発表されていることを知った。知らぬ間に文壇デビューを果たしていたのである。敦の許には小説の依頼が相次いだ、その一つに雑誌「中央公論」からの依頼があった。当時「天下の」と形容詞がついた「中央公論」からの依頼で、これに載れば一流作家とされていたこともあつてか、敦はこれぞと思う題材で執筆した。それが「弟子」である。

「弟子」は、『論語』の他に『孔子家語』『史記』『左伝』などを典拠としている。偽書の疑いが強い『孔子家語』を典拠にしていることからして、この小説が孔子や子路の歴史的真人に迫ろうとしたものでないことは容易に窺われるが、では、従来のイメージを一変させようとしたものかと言えば、そうでもない。漢学の家系に育った敦には、どちらの方向で書くにしても、それが容易でないことを知悉していたのだろう。

敦は、孔子や子路の従来のイメージを踏襲、増幅しつつ、そのことで浮き上がってくるコントラストを小説のテーマにしたのである。そのテーマは、一言で言えば愛国心である。

国のために命を捨てるというのは愛国心の極限の形だが、この小説では、その点を巡って孔子と子路の考えが対立する。たとえば、陳の忠君泄治せうぢの諫死かんしについて孔子と子路が議論する場面がある（典拠の『孔子家語』『子路初見』では質問したのは子貢で、子路は顔を出していない）。孔子は「君正しからず一國正しからずと知らば、潔く身を退くべきに、身の程をも計らず、区々たる一身を以て一國の淫婚を正さうとした。自ら無駄に生命を捐すてたものだ。仁どころの騒ぎではない」と言う。それに対して子路は、一応諫めて無駄だと知ったら身を退くというのは、諫めるといふ形を全うしただけで保身に走ったとも言えるのではないかと考え、「無駄とは知りつつも諫死した方が、国民の気風に与へる影響から言つても遙かに意味があるのではないか」と反論する。それに対して孔子は「生命は道の為に捨てるとしても捨て時・捨て処がある。それを察するに智を以てするのは、別に私の利の為ではない」と言うが、子路にはこの考え方は現実には譲歩し続けることになりかねないと思われるのである。孔子と子路の違いは、身を退くという行為に、明哲保身の精神を読むか、大局をわきまえた精神を読むかということである。小説後半で

もこの対立は繰り返される。孔子が義のために斉を伐つことを哀公に三度請い、それでも聞き入れられなかった時に、〈無駄とは知りつつも一応は言はねばならぬ己の地位だ〉と人に告げたのを知り、子路は〈一寸顔を曇らせ〉、〈夫子のした事は、ただ形を完うする為に過ぎなかつたのか。形さえ履めば、それが実行に移されなくても平気で済ませる程度の義憤なのか?〉と思うのである。小説は、子路が蒯聵の乱(典拠『左伝』『哀公十五年』)に巻き込まれて討ち死にする所で終わる。子路は〈見よ! 君子は、冠を正しうして、死ぬものだぞ!〉と叫んで死ぬが、それを聞いた孔子は〈佇立瞑目すること暫し、やがて漣然として涙下つた〉。――

愛国心が最大の徳目であつた昭和一七年当時、忠君愛国を實踐して「玉碎」する子路のような行為は無条件に賛美されるものであり、そこに注目すれば、孔子は偽善的な保身家となろう。たとえば、右翼的な評論家の室伏高信は、孔子について〈彼は常に一身の安全を期してゐた。(略)天下を救ふことを自らの任務であると考え、彼自身を賭して天下を救ふことを敢てしなかつた。〉(『孔子』、昭9・12、日本評論社)と述べている。「弟子」が室伏の言うように、孔子を保身家として貶め、子路を褒め称えているならば、時局に迎合した小説となるのだが、ことはそう単純ではない。この小説では、子路は孔子を尊敬し続けており、孔子は子路よ

りも優れた存在として描かれているからである。子路は孔子から見れば、〈自ら無駄に生命を捐てた〉ことになるのだが、それでも孔子が子路を評価するのは、子路が自身の性情である〈純粹な没利害性〉を貫いて死んだからである。その点で子路の行為は、この時代のファナティシズムとは一線を画すものであつた。

おそらく中島敦は、一般論として国のために命を捨てることに反対しているわけではない。しかし、それは十分に立ち止まって考えるべきことだということをこの小説を通して言いたかつたのだろう。敦は文学の効用を〈斯ういふ時世に兎もすれば見のがされ勝ちな我々の精神の外剛内柔性――或ひは、氣負ひ立つた外面の下に隠された思考忌避性といったやうなものへの、一種の防腐剤〉と考えていたが(「章魚木の下で」)、「弟子」はそのような考えを實踐したものであつたと見えよう。丹念に読めば、「名人伝」「李陵・司馬遷」にも同様の姿勢が貫かれていることが見て取れるのである。

※従来、深田久彌の命題によつて「李陵」と呼ばれていた作品だが、

二〇一二年に村田秀明と共に本文を校訂し直した際に、敦の残したメモに従つて「李陵・司馬遷」と改めた。『中島敦「李陵・司馬遷」定本篇・図版篇・注解篇』(中島敦の会発行、泉立神奈川近代文学館発売)を参照されたい。

クエスチョン & アンサー

漢文への興味・関心

Q 生徒に漢文に対する興味を持つてもらうにはどうすればよいでしょうか？

A 橘和久
たちばなかずひさ

城北中学高等学校教諭

生徒に漢文の興味を持たせるには、漢文やそこで表現された思想に日本がどれだけ影響を受け、また私たちの生活にどれだけ根づいているかを説明するのがよいかと思っています。

たとえば、「完璧」や「推敲」といった故事成語が日常的に使われていることは、日本で中国古典が古くから読まれ、それが日本語に多大な影響を及ぼした証左と言えます。

ます。また、「漱石枕流」の故事で孫楚そんそが即興で屁理屈をひねり出した様子を、「さすがー」と思った日本人がいたからこそ、「さすが」に「流石」という漢字を当てたわけです。

同じようなことは、「たそがれ」を「黄昏」と表記することからも窺えましょう。たとえば李商隱の五言絶句「登樂有原（樂遊原に登る）」に「只是近黄昏（只だ是れ黄昏に近し）」という一節があります。その他、『楚辞』の「離騷」にも「黄昏こうこん」という表現が出てきますが、これらの「黄昏こうこん」とは夕暮れ時のことです。「昏」は「くらい」

の意ですが、同じような意味を持つ「暗」が「光がない」という点に重きを置いているのに対して、「は・つ・き・り・し・な・い」ことに重点が置かれています。一方、日本の「たそがれ」は、古くは「誰そ彼」と表現したことから分かれるとおり、夕暮れ時に急に光量が落ちてそこにいるのが誰だかはつきりしなくなる、ことから生まれた表現です。つまり、昔の日本人は「たそかれ」を漢字で表記する際に、非常によく似た意味を持つ「黄昏」という熟語を当てたと考えられるのです。

また、『ドラえもん』に登場するひみつ道具の一つに、「サイオー馬」というものがあります。これは馬形の道具であり、良いことが起きた後に蹴飛ばされると悪いことが、逆に悪いことが起きた後に蹴飛ばされると良いことが起こる、というものです。これも、「塞翁が馬」という故事成語とその背景の思想が日本に浸透していなかったら生まれなかったものでしょう。

こういった身近な例を挙げていくことが、漢文学習の導入期で一番大切なことではないでしょうか。

二〇二〇年度 センター試験 「国語」 漢文の分析と指導

北 澤 紘 一
きた ざわ こう いち
(代々木ゼミナール)

概要と本文の要旨

二〇二〇年度 センター試験 「国語」 漢文は、東晋・南朝宋の詩人謝靈運の五言古詩「田南樹^レ園激^レ流植^レ援^レ」(田南に園を樹^たて流れを激^{せき}めて援を植^うう)からの出題である。謝靈運(三八五〜四三三)は、字を宣明といい、中国南北朝時代を代表する詩人である。門閥貴族の出身で豊かな才能に恵まれていた一方、性格は傲慢で、晩年は謀反の嫌疑をかけられ、流刑の後処刑された。出題の漢詩は、『文選^{もんぜん}』に収められている。『文選』は、南朝梁の蕭統(昭明太子)によって編纂された詩文集で、春秋戦国時代から南朝梁までの賦・詩・文章八〇〇余篇を収録している。中国では科挙受験に必要となる詩文創作の模範として尊重された。わが国にも早くから伝わり、奈良時代以降、貴族教養人の必読書とされてきた。わが国の言語文化の形成・発展を語る上で欠かせない書物である。センター試験においては、一九九二年度本試験、白居易の「放^レ鷹」(鷹を放つ)以来の漢詩の単独問題である。本文の

字数は一〇〇字で、前年度より八五字減少した。設問数は六問、マーク数は七箇所、設問数・マーク数ともに前年度より一減であった。リード文に「名門貴族の出身でありながら、都で志を果たせなかった彼は、疲れた心身を癒やすため故郷に帰り、自分が暮らす住居を建てた。これはその住居の様子を詠んだ詩である」とあり、本文の要旨が予め示されている。漢詩の単独問題であること、問3Ⅱ図を選ぶ設問、問5Ⅱ適当でないものを選ぶ設問等、形式面で驚かされたかもしれないが、設問で問われている知識・内容、難易度は標準的である。本文の字数が少ない分、従来のセンター漢文よりも短い時間で解答できるものになっている。

設問の解説

【問1】波線部ア「俱・イ」の読み方問題

(ア)「俱」は、「ともに」と読み、「ともに」「一緒に」「どちらも」といった意味を持つ。①「たまたま」と読む字には「偶」「遇」「適」、②「つぶさに」(詳しく、こまごまと)は

「問題文」

樵^{せう}隱^{いん}俱^ぐ在^レ山^ニ

由^ユ来^来事^事不^不同^同

不^不同^同非^非一^一事^事

養^フ痾^モ亦^タ園^園中^中

園^園中^中屏^{しりぞ}氛^{けふん}雜^ヲ

精^{せい}曠^{くわう}招^ク遠^遠風^風

ト室^{ぼく}倚^{シテ}北^{より}阜^ノ

啓^{ひら}扉^{キテ}面^ヲ南^ス江^ノ

激^{せき}澗^と代^タ汲^メ井^ノ

挿^う槿^{エテ}当^{むく}列^ケ墉^ヲ

群^{ぐん}木^木既^ニ羅^{つら}戸^{なり}

衆^{しゆ}山^山亦^タ对^ス [C]

靡^び迤^い趨^{シテ}下^{おも}田^{むキ}

迢^{てう}遙^{てい}瞰^{シテ}高^み峰^ル

寡^い欲^ヲ不^レ期^セ勞^ヲ

即^{シテ}事^ニ罕^{まれ}人^{ナリ}功^功

唯^タ開^キ蔣^{しやう}生^{せい}徑^ノ

永^ク懷^{おも}求^{きう}羊^{やう}蹤^{あと}

賞^E心^心不^レ可^カ忘^ル

妙^妙善^善冀^{こひ}能^{ねが}同^{よく}

(『文選』による)

「具」、③「すでニ」は「既」、「已」、④「そぞロニ」(なんとなく)は「漫」等がある。字形の類似から②「つぶさに」という誤答が多く見られた。「樵隱つぶさに山に在るも」(木こりと隠者とは詳しく山にいるが)では文意が通じない。読み方問題であつても、文・句全体の意味を意識させたい。

(イ)「寡」は、「すくナシ」と読み、「少」と同義である。漢文中で王・諸侯の一人称として用いられる「寡人」は、「徳の少ない人」という謙称から生まれたものである。現代でも「多寡」(多いか少ないか)「寡黙」(口数が少なく黙っている状態)等の熟語で用いられる。①「いつはル」と読む字には「詐」「偽」、②「つのル」は「募」、④「がヘンズ」(承知する)は「肯」、⑤「あづく」は「預」等がある。なお、「がヘンズ」は多く「不^レ肯^{ゼン}」のように否定詞とともに用いられる。また「預」を「あづく」(預ける)と読むのは、わが国での用法であり、漢文中に登場することは少ない。

【問2】傍線部A・白文の返り点と書き下し文との組合せ問題

傍線部中の「不」は、主に「不^レ」「不^ニ」「不^一」のよう
に下の用言から返って、「不^一ず」(「ない」という否定を表す。
また、「非」は、主に「非^ズ」「非^ニ」「非^一」のよう
に下の体言から返って、「不^ニあらズ」(「ではない」という否定を表す。
す。第一句から第三句までは、「樵隱俱に山に在るも、由来
事は同じからず。同じからざるは一事に非ず」(木こりと隠者

とはどちらも山中に暮らしているが、その理由や為す事は同じではない、同じではないのは一つの事柄に限ったことではない」と読むのが適当である。読みと合わせて意味も考えるようにさせたい。一般に白文問題は正答率が低い、この設問は正解者が多かった。

誤答③が一定数見られた。句形を紹介する出版物の多くが、「不^セ」「一セ^セず」と、未然形に活用する箇所をサ変の「セ」で代表させている。この「セ」に引きずられて、「同じう^セず」としている③を選んでしまう生徒がいる。「セ」が未然形を意味することを忘れずに指導したい。

【問3】傍線部Bに基づいた図を選ぶ問題

設問文には、「傍線部Bを模式的に示したとき、住居の設備と周辺の景物の配置として最も適当なものを選び」とあり、選択肢には四枚の図版が並べられている。従来のセンター国語にはなかった形式の設問である。大学入学共通テストでは、本文に基づいて図版を読解する設問、本問のように選択肢に図版が用いられる設問等が登場することが予想される。

設問の新奇さに対して難易度は高くはない。傍線部には返り点・送り仮名、一部振り仮名が付されている。「扉を啓^{ひら}きて南の江に面す」（南方の川に面して門扉を開く）とあるので、川に向かって出入口が設けられている②③に絞る。「澗を激^{たがは}めて井に汲^{せき}むに代へ」（溪流を堰き止め引き込んで井戸の代わ

りにし）とあるので、井戸が設置されている③が除外できる。

【問4】空欄Cの補充問題

漢詩句末の空欄補充は、まず押韻で選択肢を絞る。本文の詩は、絶句・律詩・排律といった近体詩が成立した唐以前に作られた古詩であるが、五言詩であれば基本的には偶数句末で押韻すると考えてよい。押韻しているかどうかは、漢字の音読みの母音部分で判断する。偶数句末の漢字は、「同」
dou・「中」chu・「風」fu・「江」kou・「塘」you・「峰」hou・「功」kou・「蹤」shouと、母音部分はouまたはuとなっている。①「窓」sou・②「空」kuu・③「虹」kouを残し、④「門」mon・⑤「月」getsuを除外する。（なお、近体詩で用いられる平水韻によれば、すべて同じ韻目ではないが、高校漢文で気にする必要はない。）

次に対句に注目する。近体詩と異なり、古詩に対句の決まりはなく、作者が任意に設定する。第十一・十二句「群木既^な羅^ら戸^こ、衆山亦^{タス}対^{たい}戸^こ」は対句になっている。空欄に対応する語は「戸」であり、①「窓」であれば、どちらも住宅の部位として類似・並列の関係になる。押韻の知識がなかった生徒は④「門」を、対句を見落とした生徒は意味から②「空」を選んでしまっていることが多い。

【問5】傍線部Dの表現に関する説明問題

「適当でないもの」を選ぶ設問であることに注意したい。

①②④を、自信を持って適当であると判断することは難しい。
⑤に「田畑を耕作する世俗のいとなみが、作者にとつて高い山々をながめやるように遠いものとなった」とあるが、リード文には「都で志を果たせなかった彼は、疲れた心身を癒やすため故郷に帰り」とある。都にいた頃に比べれば、田畑を耕作するいとなみは、近いものとなったと考えるのが自然である。②④⑤に对句という語が見えている。第十三・十四句「靡進^{びしん} 趨^き下田^{げだ}、迢通^{てうとう} 瞰^{かん}高峰^{こうほう}」は、付された返り点・送り仮名から判断して、对句になっていると言える。また、①と③とは、「靡進」↓「迢通」、「下田に趨く」↑「高峰を瞰る」と語を入れ替えただけで、ほぼ同じ内容になっており、一方だけが不適当であるとは考えづらい。誤答③が多く見られた。不適当なものを一つだけ選ぶ設問であることを忘れないようにしたい。

【問6】傍線部Eの心情説明問題

傍線部「賞心不^レ忘^ラ、妙善冀^{ねが}能^と同^と」(美しい風景をめぐる心を忘れることはできない、この上ない幸福をどうか共にしたいものだ)だけで考える必要はない。直前二句「唯^{ただ}開^あ生^{せい}怪^{くわい}、永懷^{えいわい}求^{もと}羊^{やう}蹤^{そう}」に付けられた注に注目する。「蒋生^{せいのみくら}」漢の蔣詡のこと。自宅の庭に小道を作つて友人たちを招いた。「求羊^{もとやう}」求仲と羊仲のこと。二人は蔣詡の親友であつた」から考える。作者が、自身を蔣詡に、友人たちを求仲・

羊仲になぞらえて、友人たちを自宅に招きたいと願っていることがわかる。④「我が友人たちよ、どうか我が家においてください」が正解である。正答率は高かった。

予想と対策

大学入学共通テスト開始を翌年に控え、共通テストを先取りする問題が出題された。出典には、わが国で広く読まれた『文選』が選ばれた。『文選』は、「英雄」「解散」「故郷」といった熟語、「去る者は日に疎^{うす}し」といった故事成語の出典となった書物で、現代日本語の源流、わが国の言語文化形成の原点とも言える重要な古典である。センター試験では、中国近世の随筆が多く出典として選ばれてきたが、共通テストでは、わが国で尊重された中国古典、日本漢文からの出題が増加していくものと予想される。設問としては、本年度問3のような図版を使用した設問、読了後の発展・応用を試す設問等、新傾向の問題が出題されるかもしれない。ただ、解答に必要となる力が根本的に変わるわけではない。漢文に由来しわが国の言語文化を形成する漢字・語句・定型表現・漢詩・故事成語等の正確な知識が必要である。選択肢を使つて解答するテクニクではなく自力で本文を読解する力、読み・意味を覚えるだけではなく用法にまで踏み込んだ正しい理解が、ますます重要になるだろう。

「漢字文化資料館」

連載記事

漢詩研究の權威が、「偏愛」する漢詩を語る！教科書にないすてきな作品も多数あり、漢詩の世界が広がります。

現役の医師が、「癌」と「がん」の違いなど、漢字にまつわる医学界のなぜ？を紹介。文理の枠を越えた連載です。

私たちの使う漢字は、どのように生まれ、発展したのでしょうか。その起源と変化を豊富な図版をもとにしたとどる連載です。

世界最大の漢和辞典『大漢和辞典』の歴史を、写真や『大漢和』ゆかりの品々をおして紹介。

「サンキュータツオの細かすぎる国語辞典の読み方」「体感！
痛感？ 中国文化」「漢文教室」クラシックス」

新刊特集

漢字・漢文・アジア文化、国語教育をテーマにした新刊書を紹介。「近刊先読み」では、発売に先行して内容の一部が読めます。

漢字Q&A

大好評の「漢字Q&A」。「子どもの名前に使える漢字はどのよう
な読み方をしてよいのでしょうか？」など、さまざまなQ
に答えます。気になる答えはサイトでご確認を！

今日の大漢和

『大漢和辞典』から、毎日一字を選んでトップページに掲載、クリックすれば語釈も読めます。どんな意味か予測しながらご覧ください。

漢字文化資料館

当館では、『大正和辞典』を始めとする昭和辞典を発行する大昭和出版が漢字や漢語・漢文などに関するさまざまな情報を提供しています。

Q 快速检索

■ 大塚館書店ホームページへ

 メールマガジン登録

護人自

2006-01-29

既刊

アップ

特刊

今日の大漢和

更新情報

2020.1.22
 『雑誌』『雑誌向漢語訳』第7期
 『白話文』読天 民衆教育を説く——
 読天『民衆教育を説く』を説く
 1. 民衆教育

2020.1.10
 (連載) 医学をめぐる国々の不平等
 6回「(脚) にならまでの(脚) 性」
 を掲載しました。

◎ 五五—六六

<http://kanjibunka.com/>

☆メールマガジン登録受付中!
サイトの更新情報や
メルマガ限定の記事を毎月配信。

【樺】



ツイッターはじめました
@Taishukankanji

塚田勝郎 著

『新人教師のための漢文指導入門講座
高校2・3年生編』A5判・並製・二四〇頁・
本体予価二、四〇〇円＋税 大修館書店

一昨年、とある会で筆者にお会いする機会に恵まれた。評者は勤務校で国語科教員を養成するコースに所属しており、「漢文学」という授業で筆者の前著『新人教師のための漢文指導入門講座』を使用している。喜んでその旨をお伝えしたところ、「続編も出ますよ」とのお答えがあった。以来、首を長くして待っていた。

いよいよ続編が刊行される運びとなった。続編は句法指導が中心である。ここで（評者を含めた）一般的な読者は首をかしげるかもしれない。「漢文学習は第一に句法があり、その上で作品を読み味わうことができるのではないか」と。筆者の句法指導の心得は次のとおりである。

1、句法は大事である。しかし、句法だけでなくすべてが解決するわけではない。
2、句法を指導する際は、その句法が大事である理由を生徒に明確に説明する必要

がある。

3、句法の中でとりわけ大事なのは、疑問と反語、使役と受身の四つ。この四つの形は、教材に出てくるたびに簡単に触れる。

4、句法は必ず教材と関連させて扱う。句法集の短文の羅列を覚えさせても、効果は期待できない。

5、句法は「型」であることをしつかり認識させる。訓読では「型無し」や「型破り」は認められない。

なるほど本書はこれまでに十分な議論がなされてこなかった句法指導について明確な姿勢が述べられている。また、本書は句法の指導が中心に据えられているが、安易な便利本でないのは言うまでもなく、前著から引き続き語の意味に重きが置かれており、生徒が漢字そのものに興味を持つような指導の方向性が示されている。前著同様、漢文の奥深さを知り、漢文読解に役立つ手

持ちのピースを増やすことができる。

句法指導はともすると無味乾燥になりがちだが、本書は学習内容が精選されており、加えて、ワークシートが提示されているものがある。このワークシートは筆者の長年にわたる経験が編み出した無駄のない、そして効果抜群のいわば「お宝シート」である。句法を学ぶ意義が十分に伝わってくるのはもちろんのこと、例えば、よく勉強した生徒が混乱しがちな句法が目に見える形で解説されている。膝を打つ思いがする。また、さりげない一言（*印が付されている）は目からウロコである。挙げられた例文は吟味から採択されているので知識の定着度もずっと高くなる。句法指導のまさにエッセンスが各々の一枚にまとめられているのである。

このようにして精選、吟味された句法指導によって「生徒に安心感が与えられるはず」と筆者は述べる。安心感を与えられるのは、むしろ本書を手にする読者ではないか。ペタラン、新人を問わず、教師は自信を持って授業に臨めるにちがいない。本書には「お宝動画」もついている。ぜひご覧頂きたい。

（永田里美・明星大学）

渡邊義浩・仙石知子 著

『三国志演義事典』

A5判・上製・三七六頁・
本体三、六〇〇円＋税別 大修館書店

人知の成果、人文学が危殆に瀕している。グローバル化と称する実際上の英語化、アメリカ新自由主義的価値観、エビデンス優先、数値化が、多様な文化を土足で踏みにじろうとしている。一方でわれわれは古典を顧みる以外、アジア人としてのアイデンティティーを確立し文化の血脈を伝えることはできない。

東アジア文化圏の朝鮮半島、ベトナム、琉球王朝、そして日本は、数千年来、中国古典を、自らを省み、未来を構想する鑑として来た。近世となると、誰もが古典ヘアクセス・享受できる世界的な大文学が現れる。羅漢中『三国志演義』である。『演義』は正史『三国志』にもとづいているが、さらには講釈や詩文、民間伝承からも理想的な人間像・世界観構築に有益な情報を採用している。この点『演義』は、千数百年にわたる数億の中国人の夢と理想の投影とし

ての共同制作品といつてもよい。また、一時的な流行や夢想、表層的なやり廃りとは一線を画す、思想・文化に深く根ざした総合文学といつてよい。欧米でも、非キリスト教世界の価値観を読み解くべく、これまで『演義』については満州語からのフランス語、ドイツ語訳、漢文からのラテン語、英語、スペイン語、イタリア語、エスペラント語訳も試みられている。

『演義』を多角的に読み込む本書では実在の人物だけでなく貂蟬・周倉のような民衆の願望が付託されたトリックスターにも論究される。また孔明に関するさまざまな話柄に関しても、それが木牛・流馬のように史料に基づくものや、天文に関する占いは正当視され信憑されたこと、伝承として五丈原頭の星・隕石が残存していること等、虚実それぞれの位置づけも明快になされている。

三国志に熱中してきた日本人は、その内

容を想起・反芻して、生き方を模索している。その参照として『三国志演義』以上、好適な文献を、寡聞ながら知らない。アジアの聖書といつても過言でない『三国志演義』の関連文献は汗牛充棟の観がある。三国志学会を創設し実質的な指導者である渡邊義浩氏は、伝統を現在・将来に継承する正統漢学の代表的人物である。専門の歴史学を軸足としてこれまで莫大な三国志関連書を物して後学の啓蒙を果たしただけでなく、二〇一六年には『演義』のソースとなる『全譯後漢書』を完結し、目下、まさしく『全譯三國志』をも完成させつつある。昨年の国立博物館「三国志展」を成功させたのは、彼の世界的な業績と人間関係による。正史に立脚した『三国志事典』に引き続き、三国志をめぐる文学はじめ、各種表象の展開を網羅したものがこの『三国志演義事典』である。さらに共著者の仙石知子氏は、早稲田大学で博士の学位を受け『毛宗崗批評「三国志演義」の研究』を公にし、三国志学会賞を受賞しており、確実な文学方面の情報を提供していることを強調しておきたい。ちなみに評者は渡邊氏と同じく諸葛亮に私淑している三国志狂である。

(井川義次・筑波大学教授)

向嶋成美 編著

『李白と杜甫の事典』

A5判・上製函入・九二四頁・
 本体二、〇〇〇円＋税別 大修館書店



李白と杜甫は、たしかに併称されてしかなるべき存在だ。だがじつさいにその詩を対照させて読むと、むしろ比べようがないという思いにとらわれる。詩仙と詩聖はそれぞれ別の世界を作っている。李杜の詩を往復しながら読むと、軽いめまいを起こしうである。けれどもそのめまいにこそ要訣がひそんでいと本書は教えてくれる。

本書は、李杜をただ並べて構成した事典ではない。並べることの意味がつねに意識されている。まず巻頭に置かれた編者向嶋成美氏によるⅠ「李白と杜甫」でそれは示される。「時代」から「交遊」そして「文学」へと進められる筆によって、李杜が何をしてきたのか、その違いがどこにあるかが浮かび上がる。そしてⅡ「李白」、Ⅲ「杜甫」は、そうした視角をふまえつつ、それぞれを「生涯」「旅」「詩の世界」の三つの角度から詳述する。「生涯」とは別に

「旅」の項目が設けられたことは、本書の特色の一つであろう。旅という視点から李杜を見ることで、めぐった土地と二人の詩との結びつきがより深く理解され、例えば、李白における蜀と杜甫における蜀との違いも改めて実感される。

本書の中核をなす訳注と解説が「李白詩の世界」と「杜甫詩の世界」である。内容によって分類され、李白は百十五篇、杜甫は百五十二篇の詩（さらに分類外として文章が二篇ずつ）に及ぶ。詩をていねいに読みこんだ上でなされる注釈や説明には執筆者各々の研鑽がうかがえ、読み慣れた詩にも（だからこそ）啓発されるところが多々ある。執筆者がみな編者の受業生であり、課外の読書会にもつどつていたことが「あとがき」には記されているが、そうした場での読みの姿勢がここに実を結んでいるのであろう。本書の価値の核心と言える。

さらにまた、「詩の世界」の分類が李杜それぞれの詩に即したもので、片方にしか見えない項目もありつつ、ゆるやかに重なるように配列されていることが、二人の詩を往復して読むのに恰好の手だてとなつていく。なるほど李白だと「思索Ⅱ 隠逸」となるところが、杜甫だと「思索Ⅱ 自適」になるわけが、など項目を手がかりに李杜を行き来するのは楽しい。対照の妙だけでなく、二人の世界をつなぐ通路が見えてくる。

Ⅳ「李白と杜甫を知るために」は、歴史・官制・地理から李杜の評価・詩型・語法まで、李杜を読むために必要な知識が十分に提供され、事典としての本書の価値を高めている。本書所載の詩を用例として活かした助字解説は、詩における助字の使われ方を訳注とともにただちに参照でき、漢文教育の場でも有用である。年譜や文獻、作品一覧などの「付録」も充実している。

本書は、疑いなく、李白と杜甫を読むならまず手に取るべき事典である。そしてその真骨頂は、李白と杜甫を行き来することで見えてくる詩の世界のゆたかさへと私たちを導くところにある。奥行きは深い。

（齋藤希史・東京大学）